

京都大学白眉センター

# 活動評価報告書

平成 25(2013)年5月



## はじめに

第1期の白眉研究者の採用が始まった平成22年4月から早くも3年が経過した。平成25年度となったいま、白眉センターは第4期の白眉研究者の受け入れや来年度の採用となる第5期白眉研究者の公募開始などで繁忙期を迎えている。将来、世界のリーダーとなるような優秀で高いところざしをもった研究者を支援するプロジェクトとはいえ、その推進にあたっては、ルーティンともいえる年間スケジュールを遅滞なくこなしていく支援体制の整備が必要となる。プロジェクトの構想の段階から数えると、すでに4年近くが経過したことになるが、毎年度のスケジュールをこなしていくなかでプロジェクト支援のかたちも随分と整ってきたのではないかと感じている。

その一方で、各年度に最大20名の規模で新たな白眉研究者を迎え入れるので、年度が変われば新たな問題や課題に直面することも少なくない。採用された白眉研究者を受け入れることになる学内各部局との調整、受け入れ先での研究環境の整備や事務的な支援、あるいは個々の白眉研究者がもつ採用までのキャリアに即した支援など、対処しなければならない課題も少なくない。

同時に、すでに4回にわたる白眉研究者の選考を終えたので、白眉プロジェクトに対する学内外の認知や評価もかなり定まってきたのではないかと感じている。京都大学らしい意欲的なプログラムだというお褒めの言葉をいただく一方で、このプロジェクトをずっと続けられるのですかという質問がそれに続くことも少なくない。プロジェクトが4年目を迎えたいま、その継続性に対して真摯に向き合っていかなければならない時期にさしかかっていることもプログラム担当者の実感である。言うまでもなく、担当者としてはその継続的な発展を期待しているとはいえ、学内の関係者にプログラムの成果を納得もって理解いただき、サポーターが自ずと増えてくるようになるためには、プログラム自体の到達点や課題を明らかにしておくことが欠かせない作業となる。

こうした考えのもと、白眉センターでは、毎年度の活動報告を取りまとめているが、それに加えて外部有識者を交えた評価委員会によるプログラム評価を実施することとした。その狙いは、外部評価を契機に改善すべき方向性を探るとともに、より効果的なセンターの支援活動を実現していくことに尽きる。幸い、学内外の評価委員の皆さまから忌憚のないご意見をいただくことができ、今後の改善に生かすべき視点や課題を浮き彫りにすることができた。それぞれの委員から出された意見や提案を真摯に受け止めて、今後のセンター運営に生かしてゆきたいと考えている。白眉センターの年次活動報告書とともに、評価委員の皆さまの生の声を収録する本報告書を是非ご覧いただき、白眉プロジェクトを理解していただく一助としていただくことを期待している。

本報告書の作成にあたってご協力いただいた外部評価委員の皆さま、そして取りまとめにご尽力いただいた研究国際部事務職員の皆さまに心から御礼申し上げたい。

平成25年4月30日  
京都大学白眉センター センター長  
田中 耕司



# 目次

白眉センター活動評価第1回委員会 日程	1
活動評価委員会委員	3
白眉センター活動評価 ガイドライン	5
活動評価報告	
7人の評価委員と白眉センターとの質疑応答	13
7人の委員による「評価」に関する討論	21
参考資料（抜粋）	
京都大学白眉プロジェクト平成22年度活動報告書	別冊
京都大学白眉プロジェクト平成23年度活動報告書	別冊
関係規程	
京都大学次世代研究者育成支援事業の実施に関する規程	31
京都大学白眉センターの業務に関する申し合わせ	34
白眉センター白眉研究者称号付与内規	35
京都大学白眉センター教員の兼業に関する内規	36
京都大学白眉センターにおける外部資金等の受入れに関する内規	37
白眉センター情報セキュリティ委員会内規	38
白眉センター人権委員会内規	39
実施体制	
白眉センター体制図・意思決定の流れ	40
白眉センター ワーキンググループ一覧（歴代）	42
白眉センター教員名簿	43
施設関係資料	
白眉研究者研究実施場所一覧	46
白眉センター関連施設一覧	47
白眉研究者による教育活動状況	
全学共通科目/ポケットゼミ実施一覧	48
ジュニアキャンパス実施一覧	49
白眉研究者転出先一覧	50
白眉センター内定式・研究計画発表会	51
白眉年次報告会 プログラム	52
白眉シンポジウム プログラム	53
あとがき	55



## 白眉センター活動評価第1回委員会 日程

日 時：平成25年1月23日（水）

場 所：京都大学 iCeMS（アイセムス）西館2階 会議室、北部総合教育研究棟

内 容：

- 11:30 評価委員会実施方法の説明
- 12:00 昼 食
- 13:00 白眉センター執行部からの活動内容の説明
- 13:45 北部総合教育研究棟に移動
- 14:00 研究室見学・白眉研究者へのヒアリング
- 15:15 iCeMS 西館に移動
- 15:30 休 憩
- 15:45 執行部への質疑応答
- 16:15 評価委員による検討会【評価結果】
- 17:15 評価委員会終了





## 京都大学白眉センター活動評価委員会委員

理学研究科教授	柴田 一成
生態学研究センター教授	高林 純示
法学研究科教授	林 信夫
城西大学大学院センター所長	小野 元之
大学院国際アドミニストレーション 専攻教授	
産経新聞社客員論説委員	千野 境子
鳥取環境大学理事長兼学長	古澤 巖
京都大学名誉教授	
東京外国語大学教授	DANIELS Christian

### 陪席者

白眉センター長	田中 耕司
白眉センター顧問・前センター長	伏木 亨
白眉センタープログラムマネージャー	堀 智孝



## 白眉センター活動評価ガイドライン

### <活動評価の目的>

次世代研究者育成支援事業（以下、白眉プロジェクト）が発足し、併せてその実施運営主体である白眉センター（旧名称：次世代研究者育成センター）が設立されて4年目を迎えることになりました。過去の事業活動については年度毎に報告書としてまとめていますが、本プロジェクトがさらに実効性有るものとなることを期待して、その活動に対する学内外の有識者による評価と検証を実施することとしました。

加えて、評価報告書をまとめるに当たり、在籍中並びに離籍後の白眉研究者自身から、また白眉研究者の受入れ教員や選考を担当した専門委員、伯楽委員からの、白眉プロジェクトへの期待、改善点等についての意見も反映させつつ、研究者の養成と支援という本学の長期的な展望のなかで果たすべきこのプロジェクトの役割や必要な改善点を検討する資料を得たいと考えています。

### <評価の対象>

活動評価委員会では、白眉センターが毎年度取り纏めている年次報告および付随する事業活動実績に基づいて、白眉プロジェクト（次世代研究者育成支援事業）実施状況および白眉センター運営体制を評価していただきます。白眉プロジェクトに採用された白眉研究者の研究活動・研究成果は、評価の対象外です。白眉プロジェクトの目的に照らし合せて、事業の活動内容と組織体制の適切さについて評価をしていただきます。

### <評価の方法>

活動評価委員会は2回に分けて開催いたします。評価委員の皆様には、第1回委員会に出席していただき、第2回委員会は評価報告書（案）の書面稟議とさせていただきます。

第1回委員会では、白眉センターへお集まりいただいた評価委員の皆様に対して、白眉センターより活動内容の説明をさせていただきます。その後、研究室へ移動し白眉研究者数名にヒアリングを行っていただきます。引き続き、白眉センター執行部に対する質疑応答をさせていただきます。評価委員による評価結果の検討会を1時間程度行っていただき、その議事録を評価報告書とさせていただきます。

第2回委員会では、第1回委員会の検討会の議事録（テープ起こし）を取り纏めた評価報告書（案）を各委員へ送付させていただきます。内容の確認を行っていただきます。全委員の同意をいただきましたら、評価報告書とさせていただきます。

### ●第1回評価委員会スケジュール

日	時	平成25年1月23日（水）	11:30～17:15
場	所	京都大学 iCeMS（アイセムス）西館2階	会議室、北部総合教育研究棟
内	容	11:30	評価委員会実施方法の説明
		12:00	昼食
		13:00	白眉センター執行部からの活動内容の説明
		13:45	北部総合教育研究棟に移動
		14:00	研究室見学・白眉研究者へのヒアリング
		15:15	iCeMS西館に移動

- 15:30 休憩
- 15:45 執行部への質疑応答
- 16:15 評価委員による検討会【評価結果】
- 17:15 評価委員会終了

●第2回評価委員会スケジュール

- 時 期：平成25年2月頃
- 場 所：書面による稟議
- 内 容：評価報告書（案）についての審議

<評価委員>

別紙のとおり

<評価の観点>

目的・目標、選考方針・方法、実施体制、支援体制、成果等に関して、下記のような観点を参考として評価を行っていただき、最後に総合評価を行っていただきます。各委員の評価内容につきましては、第1回評価委員会の最後に行う「評価委員による検討会」でご発言いただき、その記録を評価結果とさせていただきます。

A 白眉プロジェクトの実施並びに支援組織について

1. 事業目的を達成する上での実施体制（白眉センターの役割、運営会議のありかた等）の適正さ
2. 白眉研究者をその専門性に沿って全学の多数部局に分散配置し、各白眉にメンターを置くことの適正さ

B 白眉研究者の待遇、研究環境、研究支援のあり方について

1. 授業担当、管理運営業務を免除することの適否と適正さ
2. 研究成果について評価を課さないことの意義と適正さ
3. 事業と活動に必要な職員の配置と員数の適切さ
4. 自発的研究活動の奨励と実態把握の手法の適正さ
5. 異分野融合に向けての支援と手法の適正さ

C 白眉研究者採用の方法、時期、規模について

1. 公募の方法（国内外）と時期の適正さ
2. 選考方法・体制の適正さ（公平性、公正性、研究や人物評価の視点）
3. 白眉研究者の選考が事業目的に沿っているかの検証がされているか、その結果を役立てているか
4. 採用の規模（採用数）の適正さ

D プロジェクトの成果（次世代研究者並びに新研究領域のリーダーの育成と支援）の検証について

1. 新規研究分野の開拓とリーダーシップの啓培に向けての支援
2. 白眉離籍者の追跡調査とその実施体制

E 施設・整備の充足状況

1. 事業活動を展開する上で必要な施設・設備の整備がされているか、また有効活用されているか
2. 事業活動を展開する上で必要なICT（情報通信技術）環境が整備されているか、また活用されているか

F 財政基盤及び管理運営

1. プロジェクト維持に対する運営費の確保とその将来性
2. 事業の目的を達成するために、活動に対して適切な予算配分がなされているか
3. 経費執行が事業目的に沿っているか検証がされているか、その結果を役立てているか
4. 活動状況について、外部者（センターの教職員以外の者）による評価が行われているか
5. 評価結果がフィードバックされ、改善のための取組が行われているか

G 情報等の公表と社会との連携について

1. 公募に際して行われる「白眉プロジェクト」の周知効果
2. 広報活動の種類と適正さ

H 白眉研究者の活動状況

1. 教育者としての自己啓発に対する取り組みの支援は十分か
2. 外部資金獲得状況とその支援のあり方は十分か

以上



# 活動評価報告





以下に、白眉センター活動評価委員会による活動評価として、第1回委員会における「執行部への質疑応答」ならびに「評価委員による検討会」の内容を記載します。



## 7人の評価委員と白眉センターとの質疑応答

田中 これから委員会を再開させていただきます。まずセンター側から報告をさせていただきます。そのあと、白眉センターの運営に携わっている者に対して質問をお出しいただき、さらにそのあと、評価委員で検討していただくこととなります。検討会は、林委員に進行係をつとめていただきますが、どなたからでも結構でございますので、疑問点や明確にしたい点がございましたら、聞かせていただきます。

### 義務と負担について

ダニエルズ 白眉研究者への質問と応答を全体的に聞いて、自由に研究できる環境があると認識しました。白眉セミナーを通じてコミュニケーションが行われることがよくわかりました。飲み会も含めてですね、それは非常に素晴らしいことだと思います。ところで、大きな問題じゃないんですが、非常勤講師に関する「兼業承認状況」の表を見ますと、かなり非常勤活動が多いですね。白眉研究者に期待されているのは、教育が主ではなくて、研究が主であるということですが、例えば、ある白眉研究者の場合、6コマ13時間ぐらいやっていますね。さらに別の白眉は7コマもやっていて、そのなかには他大学でのゼミ1、ゼミ2があります。毒舌家の外部評価委員なら、“これはある大学の教育体制を京大が支えてるんじゃないか”っていう批判になりかねません。白眉研究者が教えに行くと、他大学の教育に携わることになり、いろんな規制が加わってくるので、研究に影響があることも予想されます。完全に廃止、禁止という厳しい規定を作ることは考えませんが、そのあたりのことをどういうふうに執行部が考えているのか、お伺いしたいですね。お伺いする背景は、お金を貰ってるからじゃなくて、むしろ大事な研究時間が5年しかないのに、このようなことに使っていないかどうかについてですね。

田中 白眉研究者は5年任期で採用されていますが、そのあと、大学教員という職に就く可能性の高い人たちですので、教育経験が全くないよりも教育経験があったほうが良いと言えます。いろんな公募条件を考えたとき、やはり、多少の教育経験があることが重要となります。ということで、我々としては、外部への教育はやってよろしいと言っております。ただ、それについては、京都大学教員の「就業規則」があり、兼業は“1年をならして週8時間を超えてはならない”という規則がありますので、その規則の範囲内かどうかと、本人が教育をすることによって負担にならないかの二つでもって、「兼業承認」をしています。一応それが原則ということになります。個別のケースになりますが、採用される以前からその大学で教えていて、どうしても続けて教えなければならぬという例もありますが、その場合でも週8時間を超えない範囲で承認しています。ダニエルズ委員がおっしゃったように、過度の負担になっていないかを審査して、承認しています。

伏木 別のケースですけれども、医療経済を専門とする白眉研究者が、医療現場の病院とか診療所に兼業で行く場合がありますが、そのこと自体が研究の一環であると言っています。クリニックとかに行きますけれども、“これは現場の情報収集も兼ねている”と申しておりました。

小野 今のことと関係しますが、先ほどの面談の際に、ある白眉研究者に質問したんです。その白眉は、外部から研究資金をたくさん獲得している研究者です。白眉センターでは外部資金の獲得を勧められていますけれども、本来、白眉のプロジェクトの趣旨からいきますと、“ちゃんとお金をやるよ”（笑）“自由にやりなさい”というのがものすごく大きな長所になっているのに、“さらにもっと獲ってこい”とかいうのは、どうでしょうね。“外部資金の獲得が本来の仕事の邪魔になりませんか？”と質問したんですけれども、“よく似たような仕事なので、それほど邪魔にはならない”とおっしゃっていましたが、「白眉プロジェクト」を本当にやっているのであれば、この5年間の自由さを最大限に生かして欲しいと思います。何しろ研究費として400万とかいう非常に高額なお金を出しているんですから、そのあたりを配慮する必要はありませんか。

田中 生命科学などの分野では、例えばラットのような実験動物を購入したり、その飼育をしたりするだけでも相当な経費が必要で、“400万程度では我々の仕事はできない”という声もあります。実験材料だけでなく、彼らはポスドク研究員や、一緒に研究する若手の世話をしているわけですね。白眉研究者として、つまり京大の教員として雇われているわけですが、彼ら（白眉）がまた人を雇って研究を進めていかなければなりません。しかも競争の激しい世界ですね。そういう事情があって、やっぱり何千万単位のお金を獲ってこない、自分のラボの運営ができない。白眉センターからは400万ギリギリぐらいの経費を支給しているわけですが、それだけでは足りません。ですから、研究に専念するために、外部資金は絶対必要だというのは、彼らの、大学院生の頃からの考え方で、自転車操業のようになっても大きなプロジェクトをどんどん獲っていかないと、自分が雇っている人のくびを切らなければなりません。ですから、積極的に外部資金を獲りにいっています。

柴田 それに関連してですが、私は理学部でいつも妙に感じるのは、そうやって獲得してきた外部資金で雇用する研究員に十分な待遇が与えられない、つまりよその大学で認められる身分が与えられないことが、時折あります。そこら辺はどうですか。白眉プロジェクトは若手研究者支援ですから、京大の中でも一番しっかりとこういう

問題をケアすべきだと思うんですが、今日の議論では、まだそういう問題点が出てなかったように思います。

田中 白眉研究者が大きなプロジェクトで人を雇用する場合、制度的には、「技術補佐員」として時間給で雇うケースが一番多いですね。技術補佐員となると、非常勤の時間単価が比較的高くなります。それからもう一つは研究員、いわゆる「特定研究員」で雇うのですが、「特定研究員」ですと、例えば年間200万ぐらいの給与を支給することになります。白眉研究者すなわち教員が人を雇うのは、主にプロジェクトによる「特定研究員」や「技術補佐員」と「事務補佐員」というかたちになります。

柴田 雇われた人の権利というか、白眉研究者はある意味で研究室の経営者というか、リーダーですね。そこに彼らが優秀な若い人を集めてきて研究成果上げるためには、優秀な若い人にとって魅力的なラボになっているかどうか、そういう環境を白眉プロジェクトは制度的に保証できているかどうか。

田中 そうした人たちのスペースを確保するために、例えば先程見ていただきました「北部新棟」というところで実験室を確保するのが初年度の大きな課題でした。受け入れ部局に配属するかたちで配置しましたが、彼らが1,000万以上の、あるいは次世代開発プログラムの場合ですと、5,000万とか7,000万という資金でやるわけです。当然、人も雇用するわけですね。“もう受け入れ先のスペースがありません。なんとか確保してください”というので、頑張って確保しているわけです。まずはスペースのサポートです。他方、雇用については、白眉センターではなく、受け入れ先の通常の雇用手続きに沿ってやってもらっています。

柴田 私は理科系ですので、今おっしゃった点もよくわかります。独立した研究者になりますと、たくさんの人を雇って、グループを作って、そのグループを拡大していくことが研究を大きく進める重要なファクターですね。その場合、ある研究組織に、いわば居候している白眉プロジェクトの人が、さらにそうした人を雇うという二重構造になる。そうすると、“自分（受入れ教員）はこの人を受け入れたけど、その人（白眉研究者）の弟子までは受け入れてない”っていう関係がしばしば生じます。それについては、向こうのご厄介になっている先生に、“この人（白眉研究者）は先生の下にいるけどその下にまた人を雇うので、その人をなんとかうまく置いてやってください”とお願いしていたんです。ただ、たくさん外部資金をとってグループが大きくなると、そのスペースはご厄介になってるところではなかなか取れないという問題はあります。大学の中で、その人1人じゃなくて、その人には必ず分担をさせる研究者がさらについてくるということも、ご理解願うような努力が必要だと考えています。またそれがないと彼ら（白眉研究者）も大きくならないということも問題です。“できるだけ狭いスペースで、できるだけ安くで”っていうことになるのかもしれない。

## プロジェクトの問題点と継続に向けた取り組み

田中 どんな角度からでも結構です、次のご質問を。

小野 先ほどの白眉との面談で、私はあえて“なんか問題点なり困ってることないか”って質問してみたんですが、それに対して、白眉の皆さんは“かなり白眉プロジェクトに満足している”、“このプロジェクトは非常に有効だ”という意見が多かった。いろいろなプロジェクトがありますが、“あまり問題がない”っていうプロジェクトはそんなにないはずなんです。そういうことから考えると、私はこの白眉プロジェクトは、今のところ非常にうまくいっていると思っています。そういう意味では、じゃあこれからこのプロジェクトをどうしていくのか、もちろん総長の任期はありますし、大学運営全体の問題もあるでしょう。うまくいっているシステムをこのあとどう続けていくのか。大学全体の予算をこれからも十分に確保できるのかどうか。その辺に関心をもちました。こういった問題を大学の執行部に対してどう理解させるか。細かい問題点はそれぞれ解決するのは可能だと思うんですが、このシステム、つまり白眉プロジェクトは人材育成ですから時間がかかって当たり前です。個別の白眉研究者の雇用は5年でいいんですけど、このプロジェクト自身を継続させていくために何をしなければいけないのかを、そろそろ考えていく必要があるのかなと思います。

田中 小野委員のご指摘は我々の課題でもありまして、今のところ、当面は5年を目途としてスタートしたこのプロジェクトを延長するとか、継続するとか、そういう議論が公式には全く始まっておりません。小野委員がおっしゃるように、いいプロジェクトならやっぱり続けていく必要がありますが、そのためにも我々自身がこのプロジェクトをどうアピールしていくかが課題だと思います。素晴らしい研究者がこのプロジェクトで採用されている、しかも国際的にも認知度が高まっているというような方策をきっちりと目に見えるかたちにしていくことが重要だと思います。もう一つは学内サポートです。現在のような予算削減の中で部局の予算がどんどん削られています。経常的な予算がどんどん削られていくなか、部局は予算削減で厳しいのに白眉プロジェクトをずっと続けていっていいのかという議論が必ず起こってくると思います。そういう中で、我々にできることは、その意義をしっかりと訴えるということしかありません。また、白眉プロジェクトを卒業というか、巣立っていった人たちが自分のあとに続く白眉はもう終わってしまって、その次には白眉が誰もいないというのでは、どうしようもありません。ともかく、いろんな外からの声を含めて、これからアピールしていきたいと

思います。“じゃあ具体的にどうするんだ”と言われてたら、なかなか難しいんですが、まずはしっかりと公募情報を広く全国に、それから世界に広めていくことをしながら、名前を高めていくことと、白眉研究者にいろんなかたちで、学内向けにも“白眉があること”、“白眉があって実現していること”を目に見えるようにしてもらいたいと考えています。例えば公開シンポジウムですとか、そういった機会を、もっとよく見えるように、もっとアピールしていこうと考えている状況です。

小野 論文をいっぱい出したって、この論文は“白眉プロジェクトでやった論文だ”っていうのは書いているの？

田中 著者の所属は“白眉センター”ですのでそれを論文には示しています。

小野 ああそうか、そうやってんだ。そうすると外国の人が見たら、これは白眉の研究者だとわかる。

田中 そうです。

柴田 今の関連で質問させていただきますが、天文関係の分野では、この白眉っていうのがすごく知られてました。だいたい天文っていうのは、ポジション取るのが難しいので、“こういうのはすごい、ぜひ来たい”ということでたくさんの応募があるんです。ただ、今後どうなるか、まさにその質問を受けるんです。例えば、来年以降に集めた人は、ちゃんと5年任用っていうのは保証されるですか？

田中 もちろん保証されます。仮にこのプロジェクトが5年で公募を打ち切っても、5年目に採用した人は5年任期の採用ですから、大学としての義務的経費になります。その人の5年間は総長任期とは関係なしに保証されます。5年目を迎えたときに、人数的に白眉はピークになって、山の頂をつくって終わるといふかたちですね、5年でストップっていうことであればですが。

## プロジェクトの経費確保について

田中 先ほど小野委員が、“こうなったらやっぱり続いていくことが大事だ。そのことによってプロジェクトの成果っていうのはもっと上がっていくだろう”とおっしゃったんですが、我々も白眉内部のコミュニティ作りだけではなく、京大内のサポートを高めていくことが重要だと思います。

千野 そのサポートですが、始められたときから振り返って、サポーターは大きな塊のように増えつつあると思っていられるのか、あるいは依然として厳しい状況なのか、その点はどうでしょうか？

田中 将来にわたって予算を措置できるかどうかという面では厳しいですね。ただ、“白眉プログラムでリクルートされてきた研究者たちは非常に優秀な人達だな”ということは、学内ではかなり知られているようになっています。

千野 知られているようになって、それで理解は深まっていますか？

田中 サポーターになるかどうかは別ですけど、大変ユニークなプロジェクトで、いい研究環境が与えられて、集まった人たちもなかなか優秀な人だという理解は得られています。

千野 大学に限らず、日本の社会が縦割りなので、やっぱり自分のところの権益を確保したといふかたちが優先されるかもしれませんね。

田中 そうですね。端的に言いますと60から80名ぐらいの範囲の件数を使っているわけですね。その件数で、自分の部局に1人か2人でも、人が欲しいっていう声があるわけです。それと対抗していくのは、かなりハードな作業になってくると思います。林委員は現場におられますから、そのあたりはいかがですか？（笑）

林 いや、もう既に出ていますけれども、私が一番心配しているのはやっぱり運営費なんです。参考資料に5年間の予算が出ていますが、これを本当に確保できるのかどうか。もう既に一般の教員には給料引き下げをやり、退職金も下がります。反発を受けながら、もう結構やっているんです。そういう中でこの金額が確保できるかどうかを私はものすごく危惧しています。最悪の場合を想定したとき、“件数を多少でも下げて欲しい”と言われてたとき、今いる若い人たちのインセンティブを下げないでなんとか実質を確保しようとするなら、どういふ方策が考えられますか。

田中 件数が年俸制ですので、教員の給与を定率でこの階層は何%カットということになれば、それを特定教員にも適用できるかどうかという問題になります。給与のカットを京都大学の教員として同じように足並みを揃えたかたちで予算を組むのかということが一つですね。それからもう一つは、「管理経費」です。金額的には小さ

いですが、管理経費をできるだけ節約するという予算立てになると思います。受入れ部局にはいろいろお世話になっていきますので、“「メンター経費」とか、「環境整備費」を皆さんの削減率にあわせて減らしていきます”という、受入れ先のご都合もあるでしょうから、これをどうするかは難しい点です。そんなことを考えてはいますが、今のところ、本部からまだそういう話は出ていません。

林 そろそろ次年度の予算を考える時期ですので、考えておく必要はあるでしょうね。

田中 そうですね。

林 寄付を募るっていうことはしないのですか？

田中 その話も出ています。白眉プロジェクトを進めるためには自力で少しでも基金を稼いでいくことが必要だということは、設立当初から指摘されています。

林 恐らく、総長へのアピールとしても、“自分たちでもこれだけ努力してるんだから、もし減らすにしても最小限にして欲しい”とかね（笑）。

田中 寄付金は一番目立つ努力の結果だと思いますが、難しいですね。ところで、白眉研究者は「間接経費」をかなり稼いでいます。「間接経費」は本部にも還元されていますし、受入れ部局にも部局還元分の5分の4が渡っています。“白眉も稼いでいるんですよ”とアピールしたいと思っています。おっしゃるとおり、寄付金等で基金を確保することは長期的には絶対必要になると思います。いい寄付者があれば教えて頂きたいです。

一同 （笑）

古澤 白眉に雇用された人が途中で次のポジションを見つけて出ていくのがありましたね。そうしますと、本来用意した予算を100%使っているわけじゃなくて、7割とか8割ぐらいで済んでいるわけですね。そういうことを考えると、全部のポジションが埋まるよりは、安くて済んでいるということですので、優秀な人を呼んでくれば呼んでくるほど楽になるかもしれないということです。それから今日の話を聞いていまして、今までは人数がちょうどいいぐらいだったけれど、だんだんこれから増えていくと、セミナーも膨れすぎて、人数はむしろ減らしたほうが、ひょっとしたら人材育成という点で有効かもしれないという気持ちもしたんです。そこら辺どうでしょう？

田中 採用人数の削減についてまだ具体的に検討はしていません。また、“こうしろ”という指示はありませんが、白眉センターに対して“5年後の計画をどうするのか”とか、“計画を出せ”とか言われることは十分に想定されます。予算的に非常に厳しい状況の中で白眉プロジェクトの継続を考えることになると、規模を縮小してでも「白眉プロジェクト」を長く続けていくというのは一つの選択肢になりえます。今の時点で“じゃあ、そういう計画で進めます”ということをごちらから積極的に言う必要はないので、今のところは黙っております。

一同 （笑）

小野 しかしそこは、規模の縮小をなさらないで、寄付金とか外部の研究費を増やしていくことで財政を乗り切る努力をされるのがいいんじゃないかと私は思います。ただ、例えば給料をどこも下げているときに白眉だけを下げないのは多分批判を招くと思います。そこは一度下げておいて、かわりに研究費を増やすとか、寄付金なんかの財源で増やすことをされたほうがいいですね。“今のお金は守る”という、多分他の学部からいろいろと批判が出てくるような気もするんです。いかがでしょうね。

田中 林先生にお聞きしますが、年俸制で雇用したとき、当初の契約で決めた給与は変更できるんですか？

林 基本的には駄目ですね。ですから、もし下げる場合には新規採用者からですね。今度の4月1日採用者、それ以降の採用者からであれば、契約の中身を変えればいだけですね。それ以外で下げるとなったら、結構大変ですね。下げられないわけじゃないですが法的に無理です。

小野 相手方が全員同意すれば下がるよね。

田中 一種の労使交渉のようなかたちで、“全員合意でそういうことを受け入れます”ということであればいいわけですね。

林 ええ。

## 白眉を選ぶ視点について

- 千野 途中の退職者が、23年度のほうが22年度に比べて多いですね、これは特に何かあったのですか？
- 田中 22年度は17名でスタートしています。この17名のうち、22年度内に2名が異動し、残りの1名と23年度雇用の1名が一緒になって23年度に異動しています。つまり第1期はその期に採用した2名だけでしたが、23年度に入りますと、1期と2期の両方から異動者が出ますので数が増えています。
- 千野 分かりました。混ざっているわけですね。
- 田中 そうです。
- 古澤 「白眉プロジェクト」が継続できるかできないかっていう話に関してですが、白眉センターの設置目的の中に、“世界をリードできるような人材を養成する”というのが入っていますね。それが大きな目的で、出口がそれなりに見えてくると、白眉センターの価値みたいなのが出て来るわけだから、あんまり慌ててばたばたする必要はないのかなと思います。ただ、態の悪い僕が言うんで申し訳ないんですけどね（笑）。このプロジェクトの話を聞いたときに、“さすがに京都大学やなあ”という印象を受けました。“こういうことができたらいいいよね”と。目的のものすごく面白いし、理想も高いしね、“さすがに京大のやることやなあ”と思ったんです。ただ、中身を見ていきますとね、例えばですよ、やっておられる人たちのテーマを見ますと、“んー、科学研究費なんかで出てくるテーマと、どれだけ違うのかな”と。あえて言うたら“じゃあこれぞ白眉のテーマやというふうな一つを挙げるとなるとどれが挙がるんですか”っていうふうな質問もしてみたいです。
- 一同 （笑）
- 古澤 一つは、五百件以上も出てくる応募の中で、“もっといいテーマがあったかもしれない”っていうのはちょっと引っかかる部分です。さらにちょっと悪口言っちゃいますと、伯楽委員で選ぶんですよ、最終的にはね。これは言ったら怒られるかもですけど（笑）、まあそうそうたるメンバーが選んでいるわけですね。学部長さんやセンター長さんとか、その人たちはこれまで研究生活の中でそれなりのことをやり遂げた人たちですわ。この人たちの感覚で選びますと、“こういうものやったらできるかもしれないな”という感じで選んでしまう。白眉は、“できるかできひんかわからへんけれども、非常にオリジナリティが高い、もしかしたら大化けするかもしれん”というのが、20の中に1つか2つ入っていたら十分なんですよ、何億使おうがねえ。それこそノーベル賞が出てきたら、もう全然問題ない。そういう姿勢がちょっと欠けてるのと違うかな。
- 田中 うん。いかにも京都大学名誉教授らしいご発言です。
- 一同 （笑）
- 田中 確かに古澤委員がおっしゃったように、この白眉プロジェクトが始まったとき、“これは京大でしかできないね”とか、“いかにも京大らしいね”という声をたくさん聞きました。その上で、それにふさわしい白眉が審査のプロセスで選ばれているのかということですが、白眉に選ばれた人を見ている限りでは、“1人2人じゃなくて、もっとすごい数で、すごいのがいるな”というのがわかります。研究テーマを申請書に書くときは、“何々に関する研究”というかたちになりますけれど、やっぱり人物を見たときに、“ああこれはすごいな”っていうふうな、研究面でもそうだし、人間としても“こりやあなかなかだ”って感じます。
- 古澤 いや、今日も白眉との面談で“いい人や”ということによくわかりました。
- 田中 選ばれた人たちは、全部が全部とは言いませんけれども、かなりいい人が選ばれていると思います。そういう意味では、2つのフィルターを設けていまして、一つ目では、専門の審査をやっていただいて、次に伯楽というかたちで、専門を離れて、人物評価をしていただくわけです。この2つのシステムの中で、まずある程度水準を超えている人が選ばれて、そしてその中からやっぱり、これからはものすごく、それこそ古澤委員の言葉を借りれば“大化けするかな”と思うような人たちが毎年選ばれていますね。ですから、今の審査のプロセスで見落とししているのがあるかもしれないとなると、第一次審査の段階で、500以上の人数を数十名程度の面接対象者に絞り込むわけですから、そこで漏れてる可能性があるというのは否定できません。それはただで済むことではないことですね。総じて言えば、審査のプロセスについては、結果オーライのような感じですけど、今のところ“非常にいい人が選ばれているな”という印象を受けています。そのあたりは伯楽経験者の千野委員と小野委員から、印象を出していただいてもいいかと思います。
- 古澤 センター長がそういうふうにおっしゃられるのだから、“いい”というふうな思います。

一同 (笑)

古澤 それで、5年経って卒業して出ていく白眉の中から、育っている人がまあ具体的に出てきますと、他の方もどんどんこの白眉の価値を高めていくでしょうし、そうすると“これからお金が続くか続かへんか”っていうようなことは二の次、三の次になるかしらんですね。皆さんから喜んでそれこそ寄付が集まるとかね。そういういい方向にいけばいいなあ。そういう意味では少し時間がかかるでしょうが、待つときは待たねばならないのかなと思いますね。

田中 私自身が大変嬉しく思いますのは、1年とか2年でプロジェクトを離れる人たちが、“やっぱり非常にいい経験をした”と言ってくれることです。いまから自分の赴任するところで、“自分の弟子ないしは教え子から次の白眉が出るように頑張ります”と言うんですね。そのスケールで考えるとプロジェクトを5年ぐらいで止めたらだめで、やっぱり10年20年30年とやっていかないと成果は出てこないと思います。“「白眉研究者」というタイトルは、一生使ってもらって結構です”ということですから、出ていった人たちも白眉コミュニティ出身であるということにかなり誇りを持っています。京都大学はそれを受けとめて、プロジェクトを続けていく姿勢を保ち続けてほしいと思っています。

古澤 是非、そうしてください。

田中 ありがとうございます (笑)。

小野 もう既に京都大学の教授も生まれているわけですね、医学部ですけど。

田中 はい。

小野 だからすごいことなんだ。人材育成のプロジェクトなんですから、ロングレンジで考えなきゃいけないんで、決して短い期間で切って、単純に評価してしまうのはよくない。まさに継続してこそ力になるんで、そこは是非、担当の方には頑張ってくださいと思います。

堀 私も伯楽委員を二度務めたことがあって、やっぱり迷うんですね。新規性のあるテーマっていうのは、“成功したら面白いけど、これはまじめに考えているのか”という疑問も湧きます。こわごわですが、ある人には丸をつけますし、ある人には勇気を出して丸を付けない。他の委員はどう考えておられるかなと思う候補はやっぱり票が割れますね。面白いテーマっていうのは推したい気持ちと不安だになってというのがどうしても出てくるんです。どうしたらいいかはわかりませんが、面接での応答を通して“戯れのようないい加減なもの”と“ずっと考え続けてる姿勢”との区別がもう最後の判断になります。

古澤 例えば、日頃から考えたテーマをしっかり持ってて、最初の4年間は世界の研究所、機関を回って勉強して、帰ってきて残りの1年で何かやるというような計画だったら採用されませんか？

一同 (笑)

田中 現実に、白眉研究者は配属先で研究することになっていますが、自分の研究を進めるために、世界中どこへ行ってもいいことになっています。原則としては、白眉コミュニティの一員となるために、例えば5年間の任期の間、5年間行きっぱなしっていうことはありえないわけですが、1年とか半年だとかの長期出張ということで、海外に出かけて、調査や研究をしている人も既にたくさんいます。

柴田 伯楽委員会のことを聞きたいんです。意見が別れるときの評価ですね。さっきおっしゃった“ものすごい大きな発見”っていうのはむしろそういうところから出て来ていますね。そういった研究は論文投稿したらリジェクトされるのが常なんですね。ですから逆にね、こういう選別の仕方はないんですか？その、意見の別れるものほど採用するとか。みんながおしなべて平均的に高い得票にない人を探る、そういう発想の仕方はあるんですか。

古澤 ありえますよ、それは。

柴田 そこら辺はどうですか？

伏木 今の柴田委員の発言とはちょっと別の観点ですけど、グレーゾーンのところによく似た点数が並ぶときに、全員を面接しておられる総長の判断を参考にさせていただくことはあります。

柴田 すごく意見が割れたような人も、採用されることはあるんですか。



- 田中 ときにはありますね。意見が割れた場合はだいたい真ん中に来ますから、ほとんどがグレーゾーンからの採用ですが、そういうゾーンから採用された場合もあります。
- 高林 ちなみに、一次選考委員に話を聞いたんです。“選考は不安だったけど、覚悟を決めてやると、意外にもみんな意見が分かれなかったので、すごくホッとした”って言っていました。
- 田中 専門の観点からよく見ていただいて、割とスムーズにいきますね。

## 公募要領の周知法について

- 柴田 質問なんですけど、次年度の白眉募集に当たって、例えば『NATURE』とか『SCIENCE』に、求人広告を出す予定ですか？
- 田中 国際的に認知が必要だということで、去年は『ネイチャー』のアジアパシフィック版には宣伝を載せました。去年からそれを始めましたが、今年、外国からの申請が多かったのは、その効果かなと思います。人文社会系のいわゆるリクルートのウェブサイトにも載せましたので、それが外国からの応募が増えた理由にもなっていると思います。
- 柴田 『ネイチャー』自体もいろいろ出ていますので広告として効き目があると思います。
- ダニエルス 知名度についてですが、京大で、例えば去年2月に「東南アジア研究センター」と「白眉センター」の共催で国際シンポをやりました。白眉の名前が見落とされると思うのは、外国人はみんな“東南アジア研究センターがやってるんだ”って思っていて、白眉センターの本体がなかなか見えてこないんですね。こうすればよくなるっていう名案は今のところありませんが、一考してほしい点ですね。
- 田中 白眉研究者が登場するようなシンポジウムでは、「白眉センター」の名前を共催者として必ず入れるとかの方策をとることが必要ですね。
- ダニエルス そうそう。逆に言うとね、去年の例だと、主催する方が白眉研究者だったのに、実際に来てよく働いてる2人は共に東南アジア研究センター所属でした。なんとか東南アジア研究センターの名前を外してでも白眉センターが出ればよかった。
- 一同 (笑)
- ダニエルス “やる”っていう、むしろちょっと強引なことをやらないと、白眉の存在がわかりにくいと思うんです。
- 田中 そうですね。名前上げるにはね、やはり、主催をしているという顔をもっと強く出すことが大事ですね。この件も検討させていただきます。  
ところで、質疑の時間もほぼなくなりました。これから評価委員会の本番ということになりますので、質疑はこれで打ち切らせていただきます。この後、評価委員の間で議論をしていただいて、評価につながっていく意見を出していただくというセッションにしたいと思います。委員の間で意見をかわしていただくということで、林委員に進行係を努めていただきます。なお、質問等がございましたら、陪席者として白眉センターから適宜答えさせていただきます。



## 7人の委員による「評価」に関する討論

- 林 では、評価委員による意見交換を行います。評価の視点としてまとめられている「ガイドライン」にしたがって議論をしたほうがよろしいでしょう。
- 田中 そうですね。資料1（※）でございます。
- 林 評価の観点、項目AからHまでありますが、このなかからこの点について討論しようというのがございましたらどうぞ。

### 白眉センターと受け入れ部局間での成果の共有について

- 高林 項目Aに関連しますが、論文の所属が「白眉センター」と出ています。白眉研究者のお世話をしている部局として“よく来てくれた”“バックアップしましょう”とやっています。ところで、受け入れている白眉研究者は、すごく優秀でよく賞を取るんですね。そのようなときに、部局がサポートしていて賞を取った場合に、部局名があまり表に出てこないんです。そこをなんとか出してほしいなと思います。そうすると、部局が一生懸命世話をしたメリットが見えてくるわけです。そういうためにダブル表記みたいな形で、受入れ先、要するに配置先である部局名も記して欲しいですね。
- 柴田 例えば理学研究科の場合には、「理学連携研究員」とか「連携助教」とかの身分を作って、白眉の身分と併記できるようにしています。
- 高林 部局の対応で、特定助教を「連携研究員」、「連携助教」等と呼ぶという部局内規を与えることは簡単なんですけども、白眉センターのほうでもきちっとオーソライズしてもらったほうが公式発表に出しやすいと思っています。受入れ先では、“白眉の人たちみんな、何かきつとすごいことするぞ”と思ってるわけです。受入れ先のメリットみたいなものをもうちよつときっちりしたら良いと思います。併記すればいいことですよね。併記しなきゃいけないというルールはないと思います。
- 一同 ないですね。
- 田中 所属先を「京都大学白眉センター」と記し、その後に「アンド」あるいは「コンマ」を置いて、「生態学研究センター」と続ける形で併記していただいて差し支えありません。
- 高林 それをもうちょっとオーソライズして、例えば京大のホームページで、“だれだれさんがたちばな賞取りました”って載るときにも表記法としてオーソライズしたほうがいいんじゃないでしょうか。
- 田中 そうですね。例えば京大広報とかホームページに載るとき、受入れ先部局の名前も必ず書くとか、研究者については論文を発表するときに、受入れ先部局の名前も入れるとか、そういう形の、こちら側からのいわば指導ですね。柴田委員がおっしゃった「連携研究員」とかは、理学研究科が受け入れるにあたってそういうポジションを制度化しようということで、これを理学研究科が内規で決められたんです。ですから、その場合でしたら、連携研究員という形で理学研究科という、いわばアフィリエーションと職が名前として出るということになります。これもよかったですね。
- 柴田 要するに理学研究科の教員と同じような身分や権利を与えないと、彼らが苦勞するわけです。
- ダニエルス そうすると表記の順番はどうなりますか？データベースで「京都大学」が一番最初に載ります。次に部局名が来て、2つ目以降は載せないから、アメリカのデータベースでは「京都大学」だけになるかもしれないんです。その次は、恐らく「白眉」で、最後はもし余裕があれば「受入れ部局名」になると思います。
- 田中 順番ということになると、我々のほうから、“受入れ部局を先に出しなさい”とは言えないから（一同笑い）、そういう面では、“両方併記してください”と要請するしかありませんね。
- 林 センター側で白眉の皆さんにもし何か公にするときには“受入れ先のところも書いてください”という、まずその指導が第一ですね。
- 田中 評価委員会ですらそういう意見が出たことを明記させていただきますので、それを踏まえて我々のほうで白眉研究者に指示をするというふうにしたいと思います。

- 林 ホームページその他、学内広報に載つけるときに、本部事務の取り扱いでそういうふうにしてもらう必要がある。もし皆さんの同意が得られるのであれば“こういう評価を受けたので今後白眉の受入れ部局も併記して広報その他に掲載していただく”ように事務局が言わないとだめなんじゃないですか。
- 千野 授業などは併記するようにしてますね。シラバスとかに書くときには、両方を書くようにしています。
- 林 シラバスでそうだったら、わりと行きやすい感じしますね。
- 田中 そうですね。その辺は留意しながらやっていきます。
- 林 ほかに何か新規の視点、論点はありますか。

## 認知度の向上について

- 千野 全体の質疑応答のなかで、5年後を考えることの重要性が話されたと思います。これと並んでやっぱり京大らしいプロジェクトであるという話もありましたよね。その場合に、その意味するところは、この白眉プロジェクトがどこまで他大学に刺激的に伝わって、真似するといったらおかしいのですが、日本の大学のなかでこのようなプロジェクトが次世代のためには必要なのだという、ある種、影響力を与えていくということもとても大事なのではないかと思えます。ですから、それをどういうふうに意識的にやってらっしゃるのか、やっていこうとしているのか、いや、もう京大は京大だけで孤高にやってくのだという、それも一つのあり方だと思う。私としてはやっぱり日本の大学のなかで京大には刺激的な方向を示してほしいなと思えます。もう一つ、認知されることの必要性もずいぶん言われたと思います。距離のある欧米からでも、日本研究をやりたい人は日本にくるかもしれないけれども、もっと距離的に近い東南アジアとかアジアへの目というのはどこまでフォーカスされているのか。各大学を見ていると、留学生誘致のために学長以下ずいぶん多くの方々が積極的に出ていらっしゃると思います。そういうときに白眉プロジェクトもプラスして積極的に広報して頂くことも、大事ではないかと思えます。
- 柴田 白眉ということだけでどれだけ海外の若い人が来るかどうか。多分、待遇とかいうよりも、むしろ京大にこういう先生がいて、その先生と一緒に、そのグループと一緒にやりたい。そっちのほうがはるかにアトラティブ、吸引力があると思うんです。ですから、むしろ各研究者の方々が海外からそういう若い人を集めたいときに、必ず白眉のことをセットで宣伝してもらおう。あるいは、そういう海外に居て“京大にきたい”“京大のこういう先生にあこがれている”というような若い人がいそうな所に、白眉センターを通して知らせるのが肝心なことなんですね。
- 古澤 さきほど“さすが京都大学”と僕が言ったのは、じつはこの大学も学長裁量経費とか学長リーダーシップ経費があって、同じようなことを考えてるんですね。だがここまではやらない。“さすがに京都大学、ここまでやってしまうんだな”というような意識を非常に強く持ったんですけど、そういう意味ではどんどんよその大学にも波及していくと思いますよ。その辺ぐらいまでやらないと、学長のリーダーシップなんて言葉だけですわ。よそのを見てみると、結局は事務局レベルでの、適当なばらまきで終わっちゃうんです。「学長裁量経費」って非常にいい言葉が出てきてるんだけど、実質はなかなかできない。これをきちっとできてるのが今の京都大学の白眉なのかなと思って、さすがに京都大学だという発言をさせていただいたのです。やはりすごいと思いますよ。

## 白眉という枠組みについて

- 柴田 こういうシステムを構築するというのと、もう一つはそのシステムを利用して、そこからすばらしい学問的刺激が出てくるという、白眉の役割は二つありますよね。
- 古澤 それはそうです。
- 柴田 その後者のほうに関係するのが、この資料の3ページ目(※)にある「白眉離籍者の追跡調査とその実施」というところですが、ここの「実施体制」って、今、どうなってますか？
- 田中 今のところ、離職したのが昨年度までで10名ですね。つい最近1名が離職しまして、現在は11名です。そういう人たちと、ある種の同窓会的なつながりを強めていこうということで、「白眉同窓会」がいいと思っています。「白眉」というのは、周りの人が“白眉”として褒める言葉ですけど、自分から白眉って名乗るのは気恥ずかしい。

---

※本書6ページ参照

一同 (笑)

田中 気がひけますよね。ですから「白眉同窓会」というのも、ちょっと恥ずかしいという気があるかもしれませんが、プロジェクトの同窓会ですから、そういうものを通じて卒業生、つまり離職した人たちとコミュニケーションを続けています。特に、「白眉ニューズレター」とか「白眉の日」というかたちで、白眉の現役と離職者とが一緒になって公開でシンポジウムをする、そういう企画も毎年やることになっています。今はそういうかたちで、行きっぱなしにはなっておりません。将来的には離職者が増えてくるので、ある種の同窓会というかたちで、現役と一緒にいる組織ができてくればいいなと思っているところです。

小野 白眉のネットワークをどんどん広げていくっていうのは大事だと思うけどね。

田中 ええ、そうですね。

古澤 名簿ができたりして、そうそうたるメンバーが並んできたりすると、すごくいいですね。

高林 さっきの面談で、白眉研究者たちが“ニーズが大きくなってきた”という話をしていました。ちょっと気になったんですけど、“最初2年間はごった煮みたいになってたのが、3年目で人数が増えてきて、少し階層化してきた”と言っていました。このことをちょっと危惧したんですけど、今後100人とかになっていきますよね。そのときにもいかにしてごった煮状態を維持するかを考えるとかなんのかな。

柴田 そういう印象を受けましたね。逆に言うと、今は異分野融合という観点で、ひょっとしたらすごい環境にあるのかもしれないという感じを受けましたね。

高林 この白眉の文理融合は、ほんまにうまくいくのかなと最初は思っていました。ところが白眉のみんなが“なかなか得がたい経験だ”と言ったり、“異分野の人たちと一緒に酒を飲んでよかった”とか言うので“それはよかった”と思うんです。それがもうちょっと人数が大きくなって、“ほんまにこのいい感じが維持されるのかな”という心配があります。

古澤 100人にもなったらね、なかなか難しいかもしれない。

柴田 やっぱり、100人いると難しいですよ。

田中 そうですね。そのことの議論はちょうど23年度が終わって、24年度の第3期白眉研究者を迎えるときに、しっかり検討しようということになったんです。なぜかという「白眉セミナー」はこの部屋で開くんです。第1期、2期の人で23年度末に残ったのが26名、翌年度に19名入ってきましたから、45名になりますね。セミナーには全員が出ることになっていますが、海外出張してる人ですとか、プロジェクトでどうしても抜けられない人は何人かいますから、実質的にセミナーに集まるのは30人前後です。これはまだ収容できたんです。平成24年度は心配することはなかったんです。次はいよいよ考えなきゃならないと思っています。ただ、だからと言ってそれを分野ごとに分けても、世代ごとに分けても階層的になりますから、そのへんは「研究会ワーキンググループ」で考えていただくことになるかもしれない。

小野 分けてしまうとせっかくの雰囲気失われる恐れがありますから、やはり60か70あるいは80が最大限度かなあ。

田中 このiCeMSの西館なんですけど、本館にはもっと収容能力のあるホール、研究セミナー室があるんです。そこを借りてやっていくかという案も出たんです。今年度はまだこれでできましたが来年度は、全体が集まる時は本館を借りることも必要になると思います。

柴田 ディスカッションするには60人ぐらいが多分マキシマムですよ。

田中 今の異動がコンスタントに続いていくと、総数が80名を越えることは絶対ないと思うんですね。ですから60名ぐらいで安定してくれたらいいかなというところです。

林 いま生じている階層化というのは、何による階層化が多いんですか。やはり何年目っていうのですか。

田中 階層化というよりも、酒を飲んだりして非常に仲良しの度合いが高い人とそうでない人の階層です。

一同 (笑)

田中 酒を飲まない人の階層というよりも、ある種の親和感と言いますか、そういうのはあるかと思います。堀さんのほうもありましたら。

堀 おっしゃるとおりですね。もともと、コミュニケーション好きな人を選んでいますが、各種の行事に出てこない人がいますね。分野とか年齢ではないですね。性格の問題だと思います。

田中 そうですね。1期、2期、3期でもそんなに階層があるような感じではないですね。

堀 ないですね。

林 分野による階層化じゃなければ、まだ十分いけそうな気はしますね。

堀 分野に関しての階層化はないですね。

林 ほかに何かお気づきの点はございませんでしょうか。

## メンターの定義と役割について

高林 メンターについて、ちょっとはっきりしておいたほうがいいんじゃないかなあ。つまり、私が例えば白眉の研究者と共同で研究しようと思ったときに、私は受入れ教授に仁義を切らなきゃいけないのかどうか考えちゃうんですね。そこらへんの制度か、文書があればいいけど、例えば農学部の場合は仁義を切らなきゃいかんけど、理学部は切らなくていいとか、あいまいさがあっては困るんです。

一同 (笑)

田中 実際にそういう場面に遭遇されていますか。

高林 実際、白眉研究者に“共同研究しましょう、”“受け入れの先生に会いに行って、了解を取りましょうか”って言ったら、彼からは“いえ、大丈夫ですよ”って言われました。そう言われても“ほんまに大丈夫かな”と心配しました。

柴田 「白眉」の人は教員として全く独立しているので、理学部の立場から言ったらだれとやってもいいんじゃないかと思っていました(笑)。

高林 まあ、ただその白眉がそう思っているだけで、その受け入れの先生は内心“かなんなー”と思っているかもしれない(笑)。

田中 勝手に共同研究してると見る先生もいるかもしれませんね。

高林 何かルールがあってもいいのではないですか。

古澤 所属の講座は、今でも講座制とってんでしょ？

田中 いろいろな形態がありますね。

古澤 そうすると、そこでセミナーなんかやったときにはノルマがかかっているの？

高林 ノルマっていうのは？ セミナーとかにやっぴり出るんじゃないですかね。受入れ先のね。

田中 受入れ先のセミナーはかなりみんな出ているようですね。それから白眉は教員ですが、制度的な意味での指導教員じゃないです。しかし実際に指導している場合もあると思います。

古澤 大学院とかですか？

田中 はい。大学院生を指導しているとか、あるいは研究の相談に乗るとか、そういうことは多くの白眉がやっています。

小野 今、せっかく学部学科を越えた連携ができているわけだから、センターのほうでいちいち受入れ教授がほかの先生の了解を取らなくてすむようなシステムを作っていくほうがいいとおもうんですよ。

田中 そうですね。原則的には白眉研究者が自由に共同研究していいわけですから、我々としてはまかせてあるとい

うか、彼らの判断を了解し、ことさら共同研究の可否を審査したりすることは全くしていません。

小野 だから、“そういうことが目的ですよ”ということを書いておけば、いちいち断らなくてもよくなるでしょうけどね。

高林 「メンター」というのはこういうものだという、きちっと定義をしておけば、なにか言われてもこういうものですって言えるかなと思います。

田中 資料4（※）の111ページですね。これが受入れ先との取り決めですが、事務委託の取り決めだけなんです。ですから白眉研究者の受け入れの先生を訪ねて、受け入れについての話もするのですが、“もう、だいたい大丈夫ですよ”というような感じで終わりますので、ほとんどそういう議論はないですね。

古澤 これ、今、全て京都大学の部局との関係で成り立ってるんでしょ？

田中 ええ、そうです。

古澤 よその大学とは受け入れの交渉っていうのはない？

田中 ありません。よその大学に配属するっていうことはありません。

伏木 文系の人の場合は、“個人で独立します”という人も結構多いです。その場合は相手先がないので、センターに所属することになる。この場合はセンター長が形式上メンターのような関係になりますね。他方、理系の人の場合は、その個人が独立していても、受け入れ先の厄介になっていると、いろいろな器具や装置を使ったりして、ある種のしがらみができるわけですね。いくら独立していても、その人が違う研究を進めようとする、やっぱり一言いっておかないと問題が生じますね。

林 私の今の主たる仕事の「コンプライアンス」の観点からいくと、将来的にあまり問題が起きないようにすることを考えざるを得ないわけですね。その中の一つに、研究者として“こういうことやっちゃだめですよ”っていうことが最近、特に、とりわけ京大では問題になっています（笑）。若い人たちは、こういったことを純粋に知らないという人がいるんです。“こういうことはなるべくやらないほうがいいよ”ということ、本当に知らないという。そういう人たちに対する、いわば周知活動というか、広報活動というのは、私がこのポストに就いてから、対策室が本部にできて、新任の先生を集めて研修をやるようにしたんです。白眉センターではその種のことをやっていますか？

田中 京都大学で新任教員に対する研修がありますね。それは全員に受けさせています。私自身は“中身あまりよく知りません”って言ったら怒られるかもしれませんが（笑）、一応、全員が受ける。特に新任の人は“必ず受けるよう”に伝えてあります。ただ、いろいろなことに関して事件が起きたりしますので、繰り返し繰り返し言わなきゃいかんと思います。そういう意味では折々に、例えばセミナーの機会に、みんなに報告事項という形で伝達しています。それから文書による通達は受入れ部局から、白眉研究者も含めて文書が回るようになっています。ですからこの場合は白眉センターからというよりも、受入れ部局の一教員と同じかたちで通知が行くようになっています。

## 白眉センターの予算について

古澤 白眉の経理は負担連動性でやっているんですか。繰り越しは次の年にいけるの？

田中 予算は単年度ですね。

古澤 単年度予算。そこで使い切らないかん？

田中 使い切れなかったら、これは大学に返還します。

古澤 使い切らなかったら返還するわけ？

田中 年度途中で予算の見直しがあって、“これだけ余ります”ということがあったら、その時点で返却します。

古澤 それで例えば、5年間ですよ、最初の年に250だったら、その5年間は250は保証してくれるわけ？研究計画立てていかないとねえ。

---

※別冊「京都大学白眉プロジェクト 平成22年度活動報告書」

田中 ええ、一応、この5年間の予算については、当初に決まっています。例えば人の異動とかありますから、25年度予算ということになりますと、当初は20人ということで考えていますが、離籍者があって人数が減ると25年度予算を要求するときに、減った人数をベースにして、プラス今年度の20を加えるというかたちで要求します。やっぱり当初計画よりは逡減していくかたちにはなりますね。

堀 古澤先生のご質問は白眉個人の予算ですか？

古澤 いやいや、研究者個人に250万だったら、250万くれるでしょ、研究費として。

田中 研究費のほうですか。

古澤 研究費は繰り越して持って上がれない？次の年に繰り越せない？

田中 上がりません。

堀 研究費申請は毎年やるんですね。

田中 申請は毎年です。

古澤 あ、申請は毎年するの。

ダニエルス だから、今年は200万、来年300万と変動するんですね。

古澤 やっぱり、そういうのは大学の中でなんとかならないんですかね。

田中 これは予算の性格からいって、年度内に使いきらないかんのですね。

柴田 科研費は繰り越しできるようになりましたよね。

田中 科研費はできます。

古澤 そう、できるでしょ。こういうのは大学で決めることのできる話です。研究というのは要る年と要らない年があるんですよ。そこを、特に自然科学系は本当にそれがあって、ぜひとも、研究費繰越の制度を取り入れて欲しい。

小野 運営費交付金は毎年配分されるんでしょうけども、大学の留保というのは全然認められてないんですか？

伏木 この「白眉プロジェクト」は「重点事業計画」という大学独自で生まれた事業です。財源は「大学交付金」とか「授業料」とかの収入、それに「大学運営費」からきています。毎年毎年、「重点事業アクションプラン」という計画の中でやっていますので、そこで“研究費をだいたいいくら”って言われている分についてはその当該年度で決裁します。

小野 だからそこに留保経費を若干置いておいて、年度を越えることができるような措置を取ればいいんじゃないかな。国立大学法人だったらできるはずですよ。

田中 できますか？

事務 今まででしたら、目的積立金というかたちで大学の運営費交付金も積立金として上げられたんですが、ここ何年かはやっぱり決められた事業の翌年繰り越しというのはなかなか難しくなってきました。

小野 “それは本部の方針だ”と思うからだめでしょうけど、大学の中で留保金はありうると思います。法人なんだからそれはできるはずですよ。

古澤 ぜひともね、こういう特別な研究システムですから、それはやってあげるのが非常に効率的ですし、事務も協力してくれると思いますけど。

田中 多分、事務的に財務部に行くと“だめ”と言われるでしょうね。

伏木 そうですね。それ、できたほうがいいですね。



古澤 いいとおもいますね。

小野 留保金にしといて、次の年に本当に欲しいものを買う。今のやり方はもったいないですよ。

古澤 消しゴム500個とかね。帳尻を合わすんですよ。

小野 それは猛烈な無駄だから、そこは本当に全体で運用できるようにして、他部局に回すとかね。

## 白眉刊行物について

小野 先ほどの面接で、白眉研究者の方が本当にたくさんいらして、彼らが、やっぱり、うまく、かなり伸びてくるようになっていく、それをサポートするのはわれわれの役目だと思いますね。ぜひセンターのために頑張ってください。予算をしっかりと取ってください。

柴田 京都大学の中にも、私、今日、今回、初めて白眉の広報用ニュースレターを見たんです、こういう面白い冊子があるということに気がつきました。初めてみました。

田中 あ、そうですか。選考委員の先生方には送っているはずですけど。

一同 (笑)

柴田 もしかしたら封筒に入ったままかもしれません。

田中 学内の広報は本当に難しいですね。そこらへんをさらに効果をあげるよう検討させていただきます。

千野 ちなみにこの冊子は、どのくらい学外へ配っていらっしゃるのですか？

田中 えっと、各大学の研究協力部署とか、そういうところに送ってたんですね。

小野 協定校宛に？

田中 協定校というよりは国内主要大学へですね。その数はいくぐらいでしたか？

事務 初版は2000部刷ってますが、2010年版、2011年版はもう増刷しています。

田中 それから「要覧」のほうは和文と英文を併記してますので、海外の協定大学と外国出張のときに持って行ってもらったりして、宣伝に使ってます。しかし限られた配布になってます。

柴田 これはデジタルファイルもありますか？

田中 ええ、みることができます。ウェブサイトから。

柴田 結構、読むと面白かったです。

田中 そうだと思います。白眉の「刊行物ワーキンググループ」が頑張ってやってくれています。

林 よろしいでしょうか。ちょうどいい時間で終わりました。どうもありがとうございました。

田中 それでは、閉会にあたりご挨拶させていただきます。朝から長時間にわたり委員会へのご参加、どうもありがとうございました。おかげさまで白眉研究者のヒアリング、それから検討会が無事に終わらして、ほっとしているところでございます。今日の評価委員会の検討結果は、テープを起こしまして、若干こちらのほうで編集させていただくことになるかと思いますが、取りまとめたものを2月中にはみなさんのお手元に届けます。そのうえで第2回の評価委員会は書面を回して審議していただくことになります。本日はいろいろご意見いただきましてどうもありがとうございました。これを生かしてよりよいプロジェクトにしていくことと致します。ずいぶん強いサポートをいただきまして、“5年後じゃなくてもっと長いスパンで京都大学は取り組むように頑張らなさい”というエールと受け取らせて頂きました。その方向で微力を尽くしていきたいと思っております。本日はどうもありがとうございました。



## 参考資料（抜粋）



# 京都大学次世代研究者育成支援事業の実施に関する規程

平成21年9月8日 総長裁定制定

(目的)

第1条 創造性豊かで、広い視野と柔軟な発想を持った次世代をリードする研究者を育成するため、各研究科等における育成に加え、又はこれを促進するための事業として、京都大学次世代研究者育成支援事業（以下「次世代研究者育成支援事業」という。）を実施する。

(名称)

第2条 次世代研究者育成支援事業の名称は、白眉プロジェクトとする。

(対象)

第3条 次世代研究者育成支援事業の対象は、人文学、社会科学及び自然科学の全分野の基礎研究から応用研究までの学術研究とする。

(資格)

第4条 次世代研究者育成支援事業に採用することができる者は、博士の学位を有する者又はこれと同等以上の学術研究能力を有する者とする。

(選考方法)

第5条 次世代研究者育成支援事業に採用する者（以下「候補者」という。）の選考は公募に基づいて行うものとし、第16条から第22条までに定める伯楽会議による選考を経て、その推薦に基づき運営委員会（第11条から第15条までに定めるものをいう。以下第7条第3項において同じ。）が候補者を選考及び決定する。

(実施方法)

第6条 京都大学（以下「本学」という。）に、次世代研究者育成支援事業を実施するため、白眉センター（以下「センター」という。）を設置する。

2 センターは、次世代研究者育成支援事業の企画運営を行うとともに、次条により雇用する教員の受入部局との協議調整その他次世代研究者育成支援事業の円滑な実施に関し必要な事項を処理する。

(平24.3.30裁・一部改正)

第7条 候補者として決定された者は、年俸制特定教員（准教授）又は年俸制特定教員（助教）として雇用する。

2 前項の規定により雇用された年俸制特定教員は、部局（各研究科、各附置研究所、医学部附属病院及び各センター等（国立大学法人京都大学の組織に関する規程（平成16年達示第1号）第3章第7節から第11節までに定める施設等をいう。以下同じ。））において研究に従事する。

3 前項の研究に従事する部局は、実施する研究の分野及び内容に応じて、候補者として決定するまでに、運営委員会が当該部局と協議調整のうえ定めるものとする。

(平23.3.31裁・一部改正)

(事業の規模等)

第8条 次世代研究者育成支援事業により雇用する年俸制特定教員（准教授）及び年俸制特定教員（助教）は、年度当たり合計20名を上限とする。

2 次世代研究者育成支援事業により雇用する年俸制特定教員（准教授）及び年俸制特定教員（助教）の雇用期間は、5年間とする。

3 次世代研究者育成支援事業により雇用する年俸制特定教員（准教授）及び年俸制特定

教員（助教）の給与その他の雇用条件は、国立大学法人京都大学特定有期雇用教職員就業規則（平成18年達示第21号）の定めるところによる。

- 4 次世代研究者育成支援事業により雇用する年俸制特定教員（准教授）及び年俸制特定教員（助教）に対しては、その者が実施する研究の内容に応じ、研究費を措置する。  
（センター長）

第9条 センターにセンター長を置く。

- 2 センター長は、本学の専任の教授のうちから、総長が指名する。
- 3 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、補欠のセンター長の任期は、前任者の残任期間とする。
- 4 センター長は、センターの所務を掌理する。

（センターの構成）

第10条 センターに、第7条第1項の規定により雇用する年俸制特定教員（准教授）又は年俸制特定教員（助教）を置き、必要に応じてその他の教職員を置くことができる。

（運営委員会）

第11条 センターに、その重要事項を審議するため、運営委員会を置く。

第12条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- (1) センター長
  - (2) 総長が指名する理事
  - (3) 本学の専任教員 若干名
  - (4) その他センター長が必要と認める者 若干名
- 2 前項第3号及び第4号の委員は、総長が委嘱する。
  - 3 第1項第3号及び第4号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

第13条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

- 2 委員長は、運営委員会を招集し、議長となる。
- 3 委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長が指名する委員がその職務を代行する。

第14条 運営委員会は、委員の半数以上が出席しなければ、開会することができない。

- 2 運営委員会の議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長が決する。

第15条 第11条から前条までに定めるもののほか、運営委員会に関し必要な事項は、運営委員会の委員長が定める。

（伯楽会議）

第16条 センターに、第5条の規定による候補者の選考及び推薦を行わせるため、伯楽会議を置く。

第17条 伯楽会議は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- (1) センター長
  - (2) 総長が指名する理事
  - (3) 学外の有識者 若干名
  - (4) 本学の専任教員 若干名
  - (5) その他センター長が必要と認める者 若干名
- 2 前項第3号から第5号までの委員は、総長が委嘱する。
  - 3 第1項第3号から第5号までの委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

第18条 伯楽会議に議長を置き、総長が指名する理事をもって充てる。

第19条 伯楽会議は、委員の半数以上が出席しなければ、開会することができない。

2 伯楽会議の議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長が決する。

3 前2項に定めるもののほか、伯楽会議の議事の運営に関し必要な事項は、伯楽会議が定める。

第20条 伯楽会議に、専門委員会を置く。

2 専門委員会は、伯楽会議が行う第5条の規定による候補者の選考及び推薦に関し、必要な専門的事項を調査及び審議する。

3 専門委員会には、必要に応じて第17条第1項の委員以外の者を、その委員として加えることができる。

4 専門委員会の委員は、総長が委嘱する。

5 専門委員会に委員長を置き、委員のうちから伯楽会議議長が指名する。

6 前各項に定めるもののほか、専門委員会の組織及び運営に関し必要な事項は、伯楽会議が定める。

第21条 伯楽会議及び専門委員会は、必要と認めるときは、委員以外の者を出席させて説明又は意見を聴くことができる。

第22条 第16条から前条までに定めるもののほか、伯楽会議に関し必要な事項は、伯楽会議議長が定める。

第23条 第9条から前条までに定めるもののほか、センターの組織及び運営に関し必要な事項は、センター長が定める。

(事務)

第24条 次世代研究者育成支援事業及びセンターに関する事務は、研究国際部研究推進課において処理する。

(平23.3.31裁・一部改正)

(その他)

第25条 この規程に定めるもののほか、次世代研究者育成支援事業の実施に関し必要な事項は、総長が指名する理事が定める。

附 則

1 この規程は、平成21年9月8日から施行する。

2 この規程の施行後最初に任命するセンター長の任期は、第9条第3項の規定にかかわらず、平成22年9月30日までとする。

3 この規程の施行後最初に委嘱する運営委員会委員及び伯楽会議委員の任期は、第12条第3項及び第17条第3項の規定にかかわらず、平成22年9月30日までとする。

附 則 (平成23年3月総長裁定)

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則 (平成24年3月総長裁定)

この規程は、平成24年4月1日から施行する。

## 京都大学白眉センターの業務に関する申し合わせ

平成22年4月1日 センター長制定

平成24年4月17日 改正

平成24年9月26日 改正

- 第1 この申し合わせは、京都大学次世代研究者育成支援事業の実施に関する規程第6条に基づき、京都大学白眉センター（以下「センター」という。）の運営に関し必要な事項を定めるものとする。
- 第2 センターに京都大学次世代研究者育成支援事業の業務を調整し総括するためにプログラムマネージャーを置く。
- 第3 京都大学次世代研究者育成支援事業の実施に関する規程第6条第2項に関する円滑な事業の実施を行うため、ワーキンググループを置くことができる。
- 2 ワーキンググループに主査を置き、センター所属の教員をもって充てる。
  - 3 前項の主査及び構成員は、プログラムマネージャーが指名する。
- 第4 白眉センター長（以下「センター長」という。）が必要と認めるときは、センターの運営への意見を聴くため、センターに顧問を置くことができる。
- 第5 センターに、次世代研究者育成支援事業の業務及びセンターの運営に必要な事項（運営委員会の審議事項を除く。）を審議するために、白眉ミーティングを置くことができる。
- 2 白眉ミーティングは、次の各号に掲げる者で構成する。
    - (1) センター長
    - (2) プログラムマネージャーのうち、センター長が必要と認めた者
    - (3) 研究国際部研究推進課の職員のうち、センター長が必要と認めた者
  - 3 センター長は白眉ミーティングの審議事項のうち、重要なものについて運営委員会へ報告する。
- 第6 この申し合わせに定めるもののほか、実施に関し必要な事項は、センター長が定める。

### 附 則

この申し合わせは、平成22年4月1日から実施する。

### 附 則

この申し合わせは、平成24年4月1日から実施する。

### 附 則

この申し合わせは、平成24年10月1日から実施する。



## 京都大学白眉センター白眉研究者称号付与内規

平成22年4月1日 センター長制定

平成24年4月17日 改正

- 第1 京都大学白眉研究者の称号を付与する場合には、この内規の定めるところによる。
- 第2 京都大学白眉センター（以下「センター」という。）の特定教員は、次世代をリードする優秀な研究者として認めたことを証するものとして、京都大学白眉研究者の称号を付与することができる。
- 第3 前項の京都大学白眉研究者の称号を付与する場合には、センター長は、運営委員会の議を経て称号授与の手続きを行うものとする。
- 第4 京都大学白眉研究者の称号は当該者の任期期間を超えても付与することができる。
- 第5 この内規に定めるもののほか、この内規の実施に関し必要な事項は、センター長が定める。

### 附 則

この内規は、平成22年4月1日から施行する。

### 附 則

この内規は、平成24年4月1日から施行する。

## 京都大学白眉センター教員の兼業に関する内規

平成22年4月1日 センター長制定

平成24年4月17日 改正

- 第1 白眉センター（以下「センター」という。）の教授、准教授及び助教（以下「教員」という。）の兼業の取扱いに関し、「兼業の取扱いについて」（平成21年10月5日付け総職労第44号）の理事通知のほか必要な事項は、この内規に定める。
- 第2 センター長は、教員による兼業申請について適正に審査するため、センターに兼業審査委員会（以下「審査委員会」という。）を置く。
- 2 審査委員会は、「国立大学法人京都大学に勤務する教職員の兼業に関する指針」の精神に則り、個別に審査を行う。
- 3 審査委員会は、センター長、プログラムマネージャー及び研究国際部研究推進課長で組織する。ただし、センター長が必要と認めた者を加えることができる。
- 第3 センター長は、審査委員会の審査結果に基づき、教員による兼業申請に対し、許可又は不許可の決定を行う。
- 第4 センター長は、許可した兼業について、運営委員会に報告する。
- 第5 この内規に定めるもののほか、センター教員の兼業に関し必要な事項は、センター長が定める。

### 附 則

この内規は、平成22年4月1日から施行する。

### 附 則

この内規は、平成24年4月1日から施行する。

## 京都大学白眉センターにおける外部資金等の受入れに関する内規

平成22年4月1日 センター長制定

平成24年4月17日 改正

- 第1 白眉センター（以下「センター」という。）における受託研究、民間等共同研究（研究員のみを含む。）及び寄附金（以下「外部資金等」という。）の受入れについて審査するため、外部資金等審査会（以下「審査会」という。）を設置する。
- 第2 審査会は、申込みのあった外部資金等が、センターの教育研究の推進に有意義であり、かつ、教育研究に支障をきたさないものであること並びに外部資金等の申込者（以下「委託者等」という。）、申込みの趣旨及び条件等について、審査するものとする。
- 第3 審査会は、センター長、プログラムマネージャー及び研究国際部研究推進課長で構成し、必要に応じ他の者を加えることができるものとする。
- 第4 外部資金等を受け入れようとする者は、所定の様式による委託者等からの申込書を、センター長に提出するものとする。
- 第5 センター長は、前項の提出を受けたときは、審査会に諮ったうえ、当該外部資金等の受入れの可否を決定するものとする。
- 第6 センター長は、審査会に諮った外部資金等のうち、総長が受入れを決定するものについては、その受入れを総長に申し出るものとする。
- 第7 センター長は、受入れを決定した外部資金等並びに総長に受入れを申し出た外部資金等については、運営委員会へ報告するものとする。

### 附 記

この内規は、平成22年4月1日から施行する。

### 附 記

この内規は、平成24年4月1日から施行する。

# 京都大学白眉センター情報セキュリティ委員会内規

平成24年4月1日 センター長制定

第1条 この内規は、京都大学の情報セキュリティ対策に関する規程第8条に基づき白眉センター（以下「センター」という。）に置かれる情報セキュリティ委員会（以下「委員会」という。）に関し必要な事項を定める。

第2条 委員会は、センターの情報セキュリティに関する事項を統括し、ポリシーの承認等重要事項の審議を行い、重要事項に関するセンター内及び関係部署との連絡調整を行うため、次に掲げる事項を行う。

- (1) セキュリティ対策の指導、監査に関すること
- (2) ポリシー策定評価、見直し及び実施に関すること
- (3) コンピュータ不正アクセス発生時等における調査・対策に関すること

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員で構成する。

- (1) 白眉センター長（以下「センター長」という。）
- (2) プログラムマネージャーのうちからセンター長が指名する者 若干名
- (3) その他センター長が指名する者 若干名

2 第1項第3号の委員の任期は1年とし、再任を妨げない。但し、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

第4条 委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

- 2 委員長は、委員会を招集し、議長となる。
- 3 委員会に学内における情報セキュリティに関する連絡調整、センター内における情報セキュリティに関する実務等を行うため幹事を置く。
- 4 委員会は、必要と認めるときは、委員以外の者を委員会に出席させて説明又は意見を聴くことができる。

第5条 実施に係る専門的事項を処理するため、委員会に専門委員会を置くことができる。

2 専門委員会には委員会委員以外の者を加えることができる。

第6条 委員会に関する事務は、研究国際部研究推進課において処理する。

第7条 この内規に定めるもののほか、実施に関し必要な事項は、委員会が定める。

## 附 則

この内規は、平成24年4月1日から施行する。

## 白眉センター人権委員会内規

平成24年3月23日 制定

平成24年4月17日 改正

第1条 この内規は、京都大学人権委員会規程第6条第2項の規程に基づき、白眉センター人権委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定めるものとする。

第2条 委員会は、次の各号に掲げる事項を調査・審議する。

- (1) 同和問題等人権問題が生じた場合の救済・再発防止の対処に関すること。
- (2) 同和問題等人権問題についての啓発活動に関すること。
- (3) セクシュアル・ハラスメント及びその他のハラスメント問題（以下「ハラスメント問題」という。）が生じた場合の対応に関すること。
- (4) ハラスメント問題防止のための啓発活動に関すること
- (5) 京都大学人権委員会からの調査依頼等に関すること。
- (6) その他同和問題等人権問題及びハラスメント問題防止に関し必要なこと。

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- (1) 白眉センター長
- (2) 白眉センタープログラムマネージャー
- (3) 研究国際部研究推進課長
- (4) その他センター長が必要と認める者 若干名

2 委員会に委員長を置き、白眉センター長をもって充てる。

3 委員長は、委員会を招集し議長となる。

4 委員の中に人権問題等の当事者がでた場合は、原則として審議に参画しない。

5 委員長に事故のあるときまたは人権問題等の当事者となったときは、あらかじめ委員長の指名する委員が議長の職務を代行する。

第4条 委員会のもとに、必要に応じて調査委員会を置く。

2 調査委員会委員は、委員長が指名する。

3 調査委員会は、委員会から付託された事項について調査し、委員会に報告する。

第5条 委員会及び調査委員会は、必要と認める場合、委員以外の者に出席を求め、説明又は意見を聴くことができる。

第6条 委員会に関する事務は、研究国際部において処理する。

第7条 この内規に定めるもののほか、委員会の運営その他に関し必要な事項は、委員会が定める。

附 則

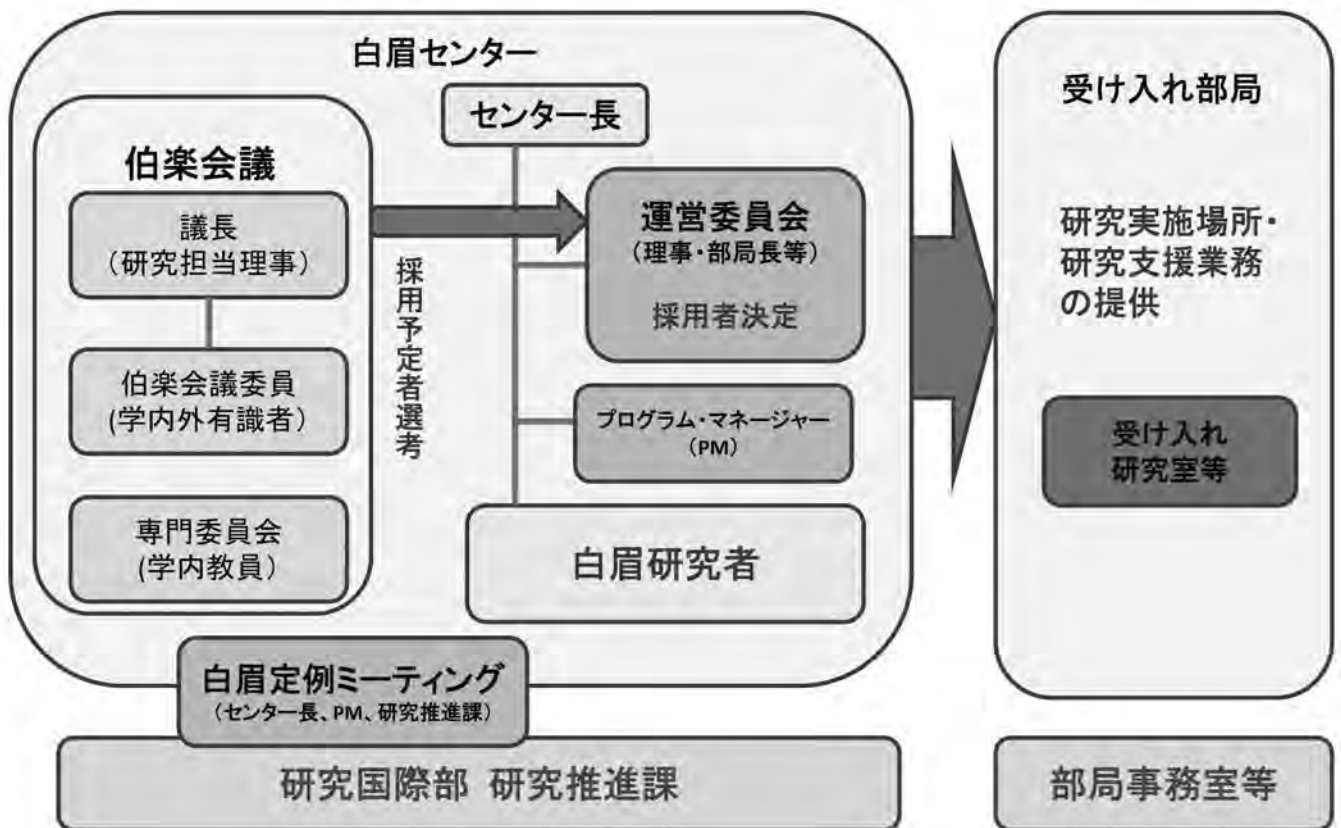
この内規は、平成24年3月23日から施行する。

附 則

この内規は、平成24年4月1日から施行する。

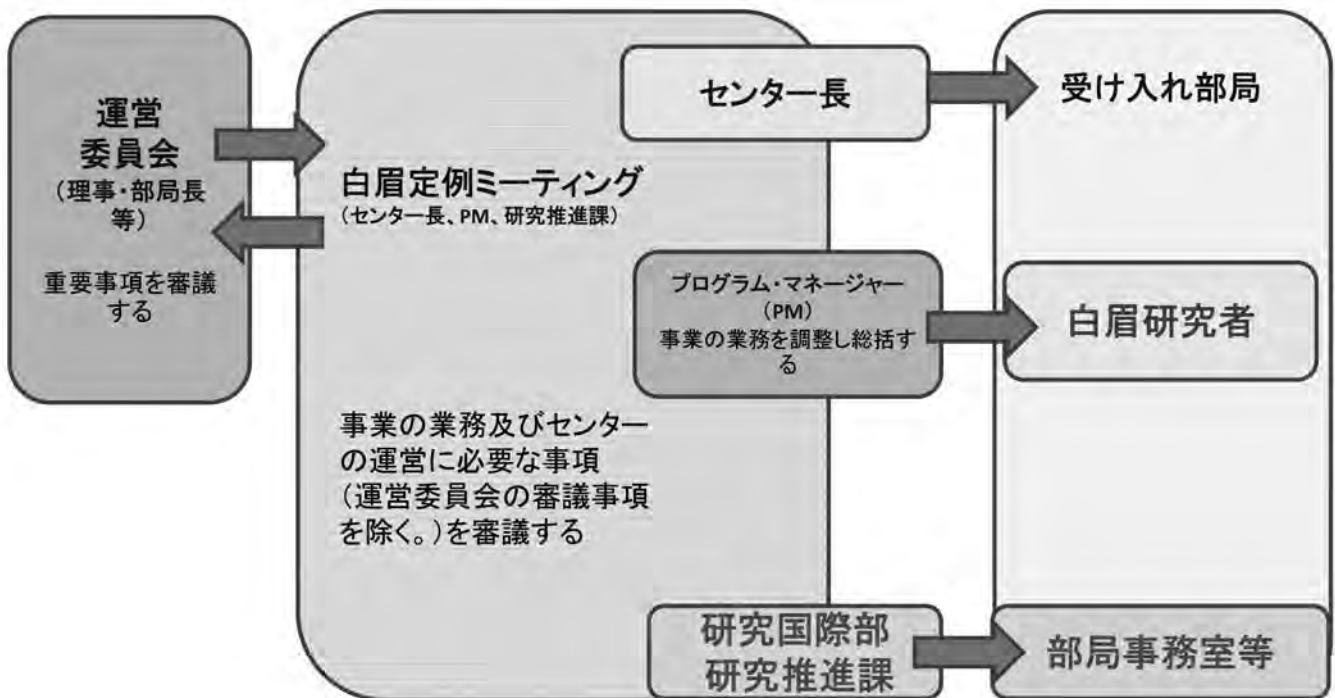
# 白眉センター体制図

H24.4.1現在



## 白眉センター意思決定の流れ

H24.4.1現在



## 白眉センター ワーキンググループ一覧(歴代)

担当WG	採用期	氏名	担当WG	採用期	氏名	担当WG	採用期	氏名
刊行物	1	Aaron Miller	研究会	1	青山 和司	広報	1	上野 賢哉
	1	川名 雄一郎		1	小川 洋和		1	佐藤 弥
	1	齊藤 博英		1	塩尻 かおり		1	千田 雅隆
	1	志田 泰盛		1	東樹 宏和		1	村主 崇行
	1	Nathan Badenoch		1	松尾 直毅		2	今村 博臣
	1	前田 理		1	吉永 直子		2	大串 素雅子
	1	柳田 素子		2	赤木 剛士		2	Simon Richard Creak
	2	Asli M. Colpan		2	今吉 格		2	西出 俊
	2	岸本 展		2	江波 進一		3	江間 有沙
	2	小林 努		2	熊谷 誠慈		3	Jesper Jansson
	2	沙川 貴大		2	佐藤 拓哉		3	末永 幸平
	2	西村 周浩		2	長尾 透		3	Pierre-Yves Donze
	2	信川 正順		2	村田 陽平		3	三枝 洋一
	2	森 靖夫		2	山崎 正幸			
	3	大河内 豊		3	北村 恭子			
	3	後藤 励		3	小石 かつら			
	3	Silvia Croydon		3	小松 光			
	3	Jeremy Rappleye		3	坂本 龍太			
	3	中西 竜也		3	Cedric Tassel			
	3	Panche Naumov		3	楯谷 智子			
3	前多 裕介	3	西山 雅祥					



## 白眉センター教員名簿

第1期

平成25年1月1日

氏名	職	研究課題名	受入先部局
アーロン ミラー Aaron Miller	助教	The idea of education in modern sports : Historical and ethnographic constructions from the US and Japan	教育学研究科
アオヤマ カズシ 青山 和司	助教	磁場中超伝導状態における磁気揺らぎ の効果の理論的研究	理学研究科
ウエノ ケンヤ 上野 賢哉	助教	論理式サイズ下界に対する線形計画的 方法論	情報学研究科
カワナ ユウイチロウ 川名 雄一郎	助教	古典的功利主義の社会思想の研究—体系 的理解と現代社会への提言	経済学研究科
サイトウ ヒロヒデ 齊藤 博英	准教授	シンセティック・バイオロジーを活用した 細胞機能制御技術の開発	iPS細胞研究所
サトウ フタル 佐藤 弥	准教授	顔を通じた社会的相互作用の心的メカ ニズムの解明	霊長類研究所
シオジリ かおり 塩尻 かおり	助教	植物コミュニケーションの生態系へのイ ンパクトとその利用	生態学研究センター
シダ タイセイ 志田 泰盛	助教	古典インド聖典解釈学派による音声の 永遠性論証の研究	文学研究科
チダ マサタカ 千田 雅隆	助教	ガロア表現の変形と保型L関数の特殊 値の岩澤理論的研究	理学研究科
ネイサン バデノック Nathan Badenoch	准教授	Language, Diversity and Resilience in the Transition to Sustainable Society	東南アジア研究所
マツオ ナオキ 松尾 直毅	准教授	遺伝子改変マウスを用いた記憶学習の メカニズムの研究	生命科学系キャリア パス形成ユニット
ムラマシ タカユキ 村主 崇行	助教	偏微分方程式の数値解析のための大規 模並列プログラムの自動生成	基礎物理学研究所

第2期

氏名	職	研究課題名	受入先部局
アスリ チョルパン Asli M. Colpan	准教授	Business Groups around the World: Theoretical Analysis and Empirical Synthesis	経営管理大学院
イマムラ ヒロミ 今村 博臣	准教授	細胞内エネルギー代謝可視化技術を用 いた代謝と疾患の研究	生命科学研究科
イマヨシ イタル 今吉 格	准教授	成体脳ニューロン新生の高次脳機能と 精神疾患への関与の解明	ウイルス研究所
エナミ シンイチ 江波 進一	准教授	独創的な手法による大気環境化学にお ける界面反応の本質的解明	生存圏研究所
オオグシ スガコ 大串 素雅子	助教	核小体の新規機能の解明	医学研究科
キシモト ノブ 岸本 展	助教	非線形分散型偏微分方程式の初期値 問題の適切性と解の挙動	理学研究科
サイモン リチャード クリーク Simon Richard Creak	准教授	Sport, Culture and Regional Community in Southeast Asia: An Alternative Vision of Region-Making	東南アジア研究所
サトウ タクヤ 佐藤 拓哉	助教	生態系間相互作用と生態系機能:寄生 者の生態学的役割の解明	フィールド科学教育 研究センター
ナガオ トオル 長尾 透	准教授	巨大ブラックホールの形成と進化の観測 的研究	理学研究科
ニシデ シュン 西出 俊	助教	ロボットの経験に基づく発達的な感覚運 動統合モデルの構築	情報学研究科
ニシムラ カネヒロ 西村 周浩	助教	文脈の中の言語:古代イタリア諸言語が 映し出す宗教的精神活動	文学研究科
ノブカワ マサヨシ 信川 正順	助教	特性X線・硬X線・ガンマ線の統合による 銀河中心活動性の解明	理学研究科
ヤマサキ マサユキ 山崎 正幸	准教授	タンパク質凝集性疾患におけるポリマー の動的形成と毒性の制御	再生医科学研究所

第3期

氏名	職	研究課題名	受入先部局
エマ アリサ 江間 有沙	助教	情報セキュリティとプライバシーの「曖昧性の効用」の実証的研究	情報学研究科
オオコウチ ユタカ 大河内 豊	准教授	超対称性をもつ場の理論に関する研究	理学研究科
キタムラ キョウコ 北村 恭子	助教	新奇集光特性を有するビームを用いた次世代光デバイスの創生	工学研究科
コイシ かつら 小石 かつら	助教	近代的演奏会の成立と変遷の総合的実証研究	人文科学研究所
コマツ ヒカル 小松 光	准教授	森林整備によってダムの上水・洪水緩和の機能は代替できるのか？	農学研究科
ゴトウ レイ 後藤 励	准教授	医療技術評価に関わる個人・社会の選好や知識	経済学研究科
サカモト リョウタ 坂本 龍太	助教	ブータン王国における地域在住高齢者ヘルスケア・システムの創出	東南アジア研究所
シルビア クロイドン Silvia Croydon	助教	Closing the Regional Human Rights Gap: The Future of the Asia Pacific Forum in East Asia	法学研究科
ジェスパー ジャンソン Jesper Jansson	准教授	Algorithmic Graph Theory with Applications to Bioinformatics	化学研究所
ジェレミー ラプレー Jeremy Rappleye	准教授	Development Aid and Education at the End of an Era: Japan, the West, and the Potential for Paradigm Shift	教育学研究科
スエナガコウヘイ 末永 幸平	助教	ハイブリッドシステムのための超準解析を用いた静的検証手法	情報学研究科
セドリック タッセル Cedric Tassel	助教	Synthesis, Properties and Characterization of Ordered/Disordered Mixed Anion Perovskites	工学研究科
タテヤ トモコ 楯谷 智子	助教	蝸牛発生の制御機構解明と聴覚再生医療への応用	ウイルス研究所
ナカニシ タツヤ 中西 竜也	助教	多言語原典史料による近代中国イスラームの思想史的研究	人文科学研究所
ニシヤマ マサヨシ 西山 雅祥	准教授	タンパク質分子機械力学応答のin?vivoイメージング	物質－細胞統合システム拠点
パンチェ ナウモフ Panche Naumov	准教授	New materials and chemical systems for alternative energy conversion	化学研究所
ピエール イブ ドンゼ Pierre-Yves Donze	准教授	Economic History of the Japanese Health System / 現代日本における医療システムの経済史	経済学研究科
マエダ ユウスケ 前多 裕介	助教	分子の構造、情報、輸送の動的結合の解明による生命の起源の研究	理学研究科
ミヅ ヨウイチ 三枝 洋一	准教授	リジッド幾何を用いたp進代数群の表現論の幾何的研究	理学研究科

# 白眉研究者研究実施場所一覧

平成24年10月1日現在  
(転出者は最終研究場所)

## 第1期採用

氏名	受入部局	
Aaron Miller	教育学研究科	教育学部本館404
青山 和司	理学研究科	理学部5号館410
上野 賢哉	情報学研究科	北部総合教育研究棟405
小川 洋和	人間・環境学研究科	吉田南キャンパス・吉田南2号館D207
川名 雄一郎	経済学研究科(10/1次世代研究者育成センターから変更)	北部総合教育研究棟405
齊藤 博英	iPS細胞研究所(平成24年4月1日生命科学研究科から変更)	北部総合教育研究棟407総合研究1号館314 iPS細胞研究所4階オープンラボ及び40
佐藤 弥	霊長類研究所	霊長類研究所実験棟407 北部総合教育研究棟406
塩尻 かおり	生態学研究センター	生態学研究センター206
志田 泰盛	文学研究科	北部総合教育研究棟405
千田 雅隆	理学研究科	理学部4号館327
東樹 宏和	理学研究科	北部総合教育研究棟408
Nathan Badenoch	東南アジア研究所	東棟105
前田 理	福井謙一記念研究センター	福井謙一記念研究センター206
松尾 直毅	生命科学系キャリアパス形成ユニット	医学部構内E棟208 医学部構内H棟106
村主 崇行	基礎物理学研究所	北部総合教育研究棟302
柳田 素子	生命科学系キャリアパス形成ユニット	医学部構内E棟
吉永 直子	農学研究科	農薬系研究棟208

## 第2期採用

氏名	受入部局	
赤木 剛士	農学研究科	農学生命科学研究棟42
Asli M. Colpan	経営管理大学院	総合研究2号館3階11 先端科学研究棟305 総合研究1号館314
今村 博臣	生命科学研究科	
今吉 格	ウイルス研究所	本館301
江波 進一	生存圏研究所	総合実験研究棟HW513
大串 素雅子	医学研究科	医学部C棟2F210
岸本 展	理学研究科	理学部4号館327
熊谷 誠慈	文学研究科	文学部新館528 iCeMS西館
小林 努	理学研究科	理学部5号館538
Simon Richard CREAK	東南アジア研究所	Room#301, East Building, CSEAS, Kawabata Campus
沙川 貴大	基礎物理学研究所	基礎物理学研究所K408
佐藤 拓哉	フィールド科学教育研究センター	フィールド科学教育研究センター旧演習林事務室(隔地教員室)
長尾 透	理学研究科	理学部4号館514
西出 俊	情報学研究科	総合研究1号館313
西村 周浩	文学研究科	文系学部校舎207
信川 正順	理学研究科	理学研究科5号館325
村田 陽平	人文科学研究科	総合研究4号館424
森 靖夫	法学研究科	法経北館101
山崎 正幸	再生医科学研究科	西館328

## 第3期採用

氏名	受入部局	
江間 有沙	情報学研究科	北部総合教育研究棟40
大河内 豊	理学研究科	理学部5号館510
北村 恭子	工学研究科	桂キャンパスA1棟-328
小石 かつら	人文科学研究科	総合研究4号館211
小松 光	農学研究科	北部総合教育研究棟405
後藤 励	経済学研究科	法経済学部東館502
坂本 龍太	東南アジア研究所	東棟313
Silvia Croydon	法学研究科	iCeMS西館
Jesper Jansson	化学研究所	Uji Research Building CB320
Jeremy Rappleye	教育学研究科	iCeMS西館
末永 幸平	情報学研究科	京都市サテライトパーク3号館601
Cedric Tassel	工学研究科	桂キャンパスA2棟-517
楯谷 智子	ウイルス研究所	本館301
中西 竜也	人文科学研究科	総合研究4号館417
西山 雅祥	物質-細胞統合システム拠点	iCeMS 研究棟104
Panche Naumov	化学研究所	共同研究棟209号室 旧工業教員養成所本館棟208、209
Pierre-Yves Donze	経済学研究科	法経東館510
前多 裕介	理学研究科	理学部5号館231 総合研究1号館314
三枝 洋一	理学研究科	理学部4号館329

## 白眉センター関連施設一覧

平成24年10月1日現在

### ●西部総合研究棟西館(iCeMS西館)

1階	B101 外国人研究員室	22m <sup>2</sup>	専任プログラムマネージャ室
	B102 外国人研究員室	100m <sup>2</sup>	共用及び事務室
2階	B204 セミナー室	36m <sup>2</sup>	白眉研究者1名で利用
3階	B302 資料保管庫	18m <sup>2</sup>	書架

### ●北部総合教育研究棟

- ・使用期間平成28年3月31日まで
- ・使用料 月額600円/m<sup>2</sup>
- ・光熱水量は原則利用者研究費にて負担

4階	405号室	53m <sup>2</sup>	白眉研究者5名で利用
	406号室	61m <sup>2</sup>	白眉研究者1名、補助者3名で利用
	407号室	57m <sup>2</sup>	白眉研究者1名、補助者3名で利用
	408号室	57m <sup>2</sup>	白眉研究者1名、補助者6名で利用
	409号室	57m <sup>2</sup>	共用
	410号室	57m <sup>2</sup>	白眉研究者1名で利用

### ●総合研究1号館・プロジェクトラボ

- ・使用期間平成27年3月31日まで
- ・使用料 月額600円/m<sup>2</sup>
- ・光熱水量は原則利用者研究費にて負担

3階	313号室 実験室5	57m <sup>2</sup>	1名で利用
	314号室 実験室6	86m <sup>2</sup>	生命系共用研究室

### ●日本イタリア京都会館

- ・賃借契約平成24年4月1日～平成26年3月31日

2階	204号室	55m <sup>2</sup>	白眉研究者1名で利用、第4期白眉研究者入居予定
----	-------	------------------	-------------------------

### ■宿舎利用状況

宇治職員宿舎入居 1名

## 全学共通科目実施一覧

### 2012年度

授業担当 責任者	科目名	科目群	開講期
川名 雄一郎	【ポケットゼミ】京都大学読み歩き	B	前期
山崎 正幸	【ポケットゼミ】タンパク質のかたちを観る／生命現象を観る	B	前期
塩尻 かおり	【ポケットゼミ】かおりの生態学植物の匂いを介した生物間相互作用	B	前期集中
東樹 宏和	【ポケットゼミ】生物多様性と生態：系野外調査から DNA実験・生態系ネットワーク解析まで	B	前期集中
ピエール・イヴ・ド ンゼ	Japanese Economic History[International Course]	A	前期
ピエール・イヴ・ド ンゼ	Current Economy of Japan[International Course]	A	後期

### 2011年度

授業担当 責任者	科目名	科目群	開講期
川名 雄一郎	【ポケットゼミ】旅行記を読む	A	前期
東樹 宏和	【ポケットゼミ】生物多様性と共生ネットワーク ～野外調査からメタ・ゲノム解析まで～	B	前期集中

A群：人文科学・社会科学系科目

B群：自然科学系科目

D群：保健体育科目

## ジュニアキャンパス実施一覧

2012

テーマ	講師	ゼミの内容等	実施形態	備考
光学—私たちは何を「見て」いるのだろう？—	北村 恭子(白眉センター(工学研究科)特定助教)	夜、暗闇の中で私たちはものを「見る」ことはできません。太陽からの光や蛍光灯を無くしては私たちは何かを「見る」ことはできないのです。私たちにものを「見る」ことを可能にしてくれる光は、実は情報化社会やナノテクノロジーの発展をも支えています。このゼミでは、光の「波」としての性質を学びながら、私たちは何を「見て」いるのか理解することを目指します。また、最先端の技術を駆使して作製される、光を自由自在にコントロールするナノ構造体(フォトニック結晶)を紹介します。	講義・実験型	保護者参加型
生命って何？ ～生命の始まりから終わりまで～	齊藤 博英 (白眉センター(iPS細胞研究所)特定准教授) 山崎 正幸 (白眉センター(再生医科学研究所)特定准教授) 大串 素雅子 (白眉センター(医学研究科)特定助教)	生命って何？生命って創れるの？ このゼミではそんな質問に答えるべく生命の始まりから終わりまで科学的観点からわかりやすく説明し、生命について議論したいと思っています。また、生きている生物は全て細胞からできています。生命の始まりである受精卵をはじめ、様々な細胞を観察し理解を深めてもらいたいと考えています。	講義・実験型	保護者参加型
幸せについて みんなで考えよう ～ブータンから学べる事～	山崎 正幸 (白眉センター(再生医科学研究所)特定准教授) 江間 有沙 (白眉センター(情報学研究科)特定助教) 坂本 龍太 (白眉センター(東南アジア研究所)特定助教)	あなたはどんな時に幸せを感じますか？ヒマラヤ地域にいるお年寄りにはどんな時に幸せを感じるでしょう？ 幸せの国ブータンで現地医療を勤めた経験を紹介させていただきつつ、これからの未来を創っていくみなさんと幸せについて考えていきたい。そんなゼミです。	講義	保護者参加型
宇宙の誕生と進化—宇宙の理解へ向けた多様なアプローチ	大河内 豊 長尾 透 (白眉センター(理学研究科)特定准教授)	超巨大望遠鏡による宇宙観測。そこから導きだされる宇宙像はどのようなものか？ さらに時間をさかのぼり、誕生まもない初期宇宙の素粒子論における理解はどのようなものか？ 宇宙の誕生と進化の理解へ向けた研究者の多様なアプローチを紹介したい。	講義	保護者参加型

2011

テーマ	講師	ゼミの内容等	実施形態	備考
植物のかおりを生態学する	高林 純示 (生態学研究センター教授) 塩尻 かおり (次世代研究者育成センター特定助教)	鏡の国のアリス冒頭には、アリスと話をするオニユリが登場します。これは鏡の国だけの話でしょうか？実際植物は、花や葉っぱから出る「かおり」で、様々な生き物と複雑な関係を作っていて、それはまるで「話をしている」と形容できる様な不思議さです。実験やゲームを通して、そのような世界を体感してもらおうと思います。	ゼミ型	保護者参加型

## 白眉研究者 転出先一覧

H25.1.1現在

募集年度	採用日	氏名	職名	退職日	就職先
21年度募集	H23.1 採用	吉永 直子	助教	H23.2 退職	→ 京都大学大学院農学研究科・助教
21年度募集	H22.4 採用	小川 洋和	准教授	H23.3 退職	→ 関西学院大学文学部・准教授
22年度募集	H22.12 採用	森 靖夫	助教	H23.3 退職	→ 同志社大学法学部助教
22年度募集	H23.4 採用	赤木 剛士	助教	H23.6 退職	→ 京都大学農学研究科助教
21年度募集	H22.4 採用	柳田 素子	准教授	H23.10 退職	→ 京都大学医学研究科教授
21年度募集	H22.4 採用	前田 理	助教	H24.1 退職	→ 北海道大学理学研究院助教
22年度募集	H23.4 採用	熊谷 誠慈	助教	H24.3 退職	→ 京都女子大学発達教育学部専任講師
22年度募集	H23.4 採用	小林 努	助教	H24.3 退職	→ 立教大学理学部准教授
21年度募集	H22.4 採用	東樹 宏和	助教	H24.3 退職	→ 京都大学地球環境学堂/人間・環境学研究科・助教
22年度募集	H22.12 採用	村田 陽平	助教	H24.3 退職	→ 近畿大学文芸学部専任講師
22年度募集	H23.4 採用	沙川 貴大	助教	H24.12 退職	→ 東京大学大学院総合文化研究科准教授



## 平成24年度京都大学白眉センター内定式、研究計画発表会

日 時：平成25年1月16日（水）

内 定 式 13:30～13:50

研究計画発表会 14:00～17:30

場 所：楽友会館2階 会議・講演室

### タイムスケジュール

13:30	内定式
	1. 開式
	2. 総長挨拶
	3. 内定書授与
	4. 閉式
13:50	内定式終了

～ 休憩 ～

14:00	研究計画発表会
	採用内定者（19名のうち18名出席）が順次、自身の研究計画を発表 1名あたり 発表時間5分程度 質疑応答5分程度
17:30	研究計画発表会終了

第二回白眉年次報告会

# 白眉のコスモロジー

## 2012

【日時】  
平成24年4月12日(木)午後1時半より5時半まで

【場所】  
京都大学医学部芝蘭会館 稲盛ホール  
(京都市バス 京大正門 前下車 徒歩2分)

【主催】  
京都大学次世代研究者育成センター

【白眉プログレス】  
 「若年性肝硬変、肺気腫を引き起こすタンパク質凝集体構造の正体とは？」 山崎正幸  
 「偏微分方程式を解くプログラムの自動生成と自動進化」 村主崇行  
 「水の界面におけるホフマイスター効果の謎とその解明」 江波進一  
 「For Mettle or Money: Conflicting Goals in Big-time College Sports in the US」 Aaron Miller  
 【異分野融合ワークショップ〜見えるものと見えないもの】  
 「宇宙を観る」 長尾透、「心は見えるか？」 松尾直毅、「見えるものは有るのか？」 熊谷誠慈  
 【白眉研究者によるポスターセッション】

Hakubi  
[http://www.hakubi.kyoto-u.ac.jp/00\\_new/cosmology2011.html](http://www.hakubi.kyoto-u.ac.jp/00_new/cosmology2011.html)

白眉年次報告会 プログラム

# 第1回白眉シンポジウム

# いのち・こころ・ことば

命の奇跡や偶然を信じますか。  
人の心は闇だと諦めますか。  
通じ合えない言葉の持ち主を愛せますか。  
我々の内に潜むもつれた謎の一部を紐解きます。

TERNA TIBI HAEC PRIMVM TRIPLICI DIVERSA COLORE LÍCIA CIRCVMDO TERQVE HAEC ALTARIA CIRCVM EFFIGIEM DVCO NYMERO DVVS IMPARE GAVDEI VERGL&8.73-75

【日時】2012年2月14日(火) 午後5時より7時半まで

【場所】京都大学楽友会館(右の地図を参照ください)

【主催】京都大学次世代研究者育成センター(白眉センター)

いのち、こころ、ことば。

その間をつなぐ未知の領域をわれわれ白眉研究者と語り合いませんか?

目指すのは全く新しいタイプの全体討論型シンポジウムです。

\*プログラムの詳細は、白眉プロジェクトHP (<http://www.hakubi.kyoto-u.ac.jp>)をご覧ください。



話者提供



大串 素雅子

白眉プロジェクト  
核小体の新規機能  
でのテーマ



佐藤 弥

顔を通じた社会的相互作用  
の心理的メカニズム



ネイサンバデンバーグ

多様性に対する  
言語からとらえた地域の転換期

司会



51 熊谷 誠昌



山崎 正幸



## 白眉シンポジウム プログラム



## あとがき

いま、この報告書は編集がほぼ了った状態にある。全文を見直しながら、本書がどのような所に届くのか、どれくらいのお人の目にとまるのか、あれこれ思いを巡らせている。多分、本書を紐解いてくださるのは、人材育成に関わるプロジェクトを計画している方、人材育成課程に寄り添っている方、そして育成課程の終期にあってその評価を具体的に示したいと考えている方だと想う。加えてもう一つ、目を止めていただけるのは、大学の今とこれからを思案している方々だろう。大学の中核的役割は研究と教育、これを通して次世代を立派に育てるという大学の果たすべきところははっきり謳いあげることではできても、実際にどうすればいいのかは難問中の難問である。

本白眉プロジェクトは、次世代を担う先見的なリーダーの育成を目的として三年目の活動を終え、残る二年に立ち向かっている。プロジェクトのこれまでとこれからを正しく見据えるために、7人の委員を招いて、プロジェクトの実施主体（白眉センター）との間で質疑と応答を交わし、併せて、委員の間で評価に関する自由な討論を行って頂いた。質疑応答と討論の録音を活字にして本書に収め、白眉プロジェクトに対する評価のまとめとした。評価意見を添削して簡潔な結果のまとめを作るよりも、質疑応答と討論を通して各委員の生の声を残し、白眉プロジェクトの実像を後世に残したかったからである。評価委員の声の中から、プロジェクトの実像に迫る討論の一部を抜き出してみる。

◇（白眉研究者への質問と応答を全体的に聞いて）自由に研究できる環境があると認識しました。（本書13頁第2段落）

◇ 白眉センターの設置目的の中に、世界をリードできるような人材を養成するというのが入っていますね。（中略）さすがに京都大学やなあという印象を受けました。こういうことができたらいよいよねと。目的もものすごく面白いし、理想も高いしね。（中略）ただ、やっておられる人たちのテーマを見ますと、「んー、科学研究費のテーマと、どれだけ違うのかな」。（同17頁第5段落）

◇ この白眉プロジェクトがどこまで他大学に刺激的に伝わって、（中略）日本の大学の中でこのようなプロジェクトが次世代のためには必要なのだという、ある種、影響力を与えていくということもとても大事なのではないかなと思います。（同22頁第6段落）

◇ 海外に居て「京大に来たい」「京大のこういう先生にあこがれている」というような若い人がいそうな所に、白眉センターを通して知らせることが肝心などこなんですね。（同22頁第7段落）

その他にも様々な観点から意見を受けたが、今回の評価に入らなかった事項がある。白眉研究者（任期5年の特定教員）の選考方法の特性である。白眉研究者は、京都大学による「分野横断型」の教員採用であって、従来型の個別部局による「専門分野型」とは異なった評価や観点で採用される。白眉研究者はまず京都大学教員を体験し、そのあとテニユアー職を求めて、本学あるいは他大学研究機関に移る。このように彼らは全く性格の異なる選考に堪えて、研究者並びに教育者としてのつとめを果たすことになる。白眉研究者がそれぞれにテニユアー職に就く時期を待って、彼らから白眉プロジェクトを経験したことの功罪を是非とも聞いて見たい。人材育成に関する見逃せない要因が聞こえてくるような気がしてならない。白眉プロジェクトの真の評価を論ずるという意味では、本報告書が完成するのは今しばらく先のことになる。

平成25年5月  
京都大学白眉センター プログラムマネージャー  
堀 智 孝





京都大学白眉センター  
**活動評価報告書**

平成25(2013)年5月

---

編集・発行／京都大学白眉センター  
〒606-8301  
京都市左京区吉田牛ノ宮町  
TEL.075-753-5315  
FAX.075-753-5310

印刷・製本／株式会社 イワサキ